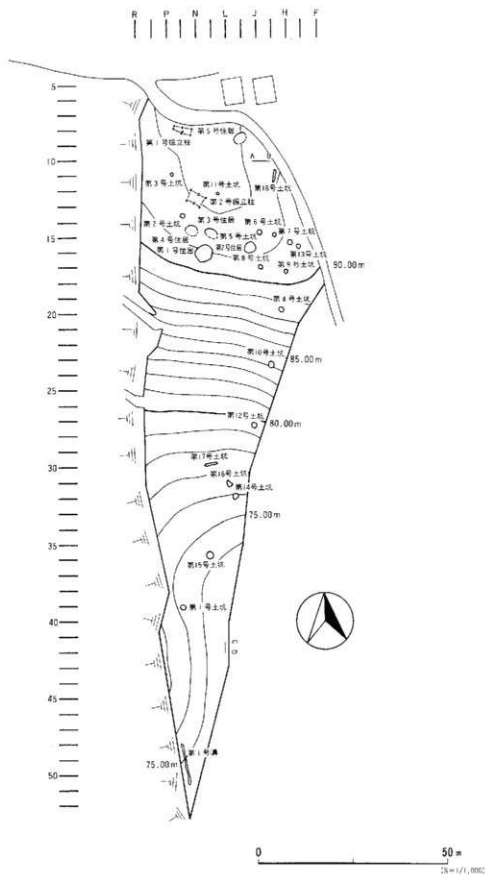


第2編 寺山(3)遺跡



完掘状況(南から)



第1図 遺構配置

第1章 基本土層

調査区は、北側の標高92mの丘陵頂部から南側へ下る斜面地と南側の低地部であり、各部分で土層の堆積状況は異なる。丘陵頂部付近は、遺構と遺物が集中する範囲で、比較的層厚は薄く第II層や第V層は断続的であり第VI層は欠層する。斜面部は、傾斜に沿って第V層以上の各層がほぼ均一な層厚で堆積する。低地部分は全層に層厚がある。特に端部では黒色土が厚い。土層の確認は、グリッドライン10の部分とグリッドラインLの調査区境界部を深堀して確認した。以下に各層について記述するが、第VIII層は、基盤となる八戸火山灰層に相当し、第VIII層～第VIII F層まで細分できる。

第I層 1.7/1 黒色土：表土層。現況が林地であり草根が多くしまりが非常に弱い。調査区内においての層厚に大きな違いはない。

第II層 1.7/1 黒色土：砂質黒色土層。中礫浮石を微量に混入し、しまりは弱い。

第III層 10YR2/2 黒褐色土：中礫浮石を少量混入する。縄文時代の遺物を包含する。

第IV層 10YR2/3 黒褐色土：中礫浮石を多量混入する。しまりは弱い。遺物の出土量が最も多く、縄文時代前期から中期の生活面であったと思われる。

第V層 10YR8/6 明黄褐色土：中礫浮石層。上部層との混合が一部見られる。

第VI層 10YR2/2 黒褐色土：中礫浮石粒と黄褐色浮石粒が少量混入する。

第VII層 10YR2/3 黒褐色土：南部浮石層に相当する層である。しまりはやや強い。

第VIII A層 10YR4/4 褐色土：淡黄褐色浮石粒が少量混入する。縄文時代早期の遺構検出面である。

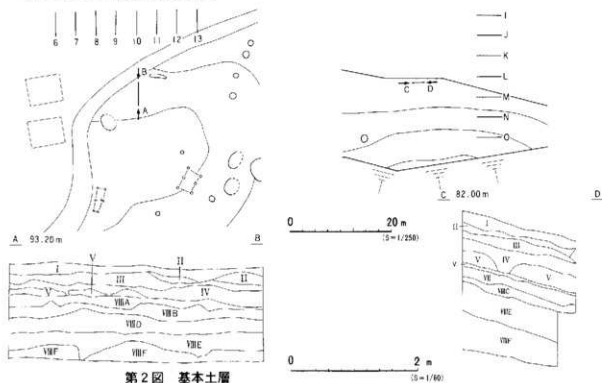
第VIII B層 10YR5/8 黄褐色土：淡黄褐色浮石粒が少量混入する。VIII A層の漸移層。

第VIII C層 10YR3/3 褐色土：平坦部では欠損する。

第VIII D層 浮石層：粒径約3mmから50mmの浮石が密に堆積する。

第VIII E層 10YR5/6 黄褐色土：斜面の層厚は50cm程度になる。

第VIII F層 10YR6/6 明黄褐色土



第2図 基本土層

第2章 検出遺構と遺物

概 要

本調査で検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑18基、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、炭窯1基、である。遺構は、調査区北側丘陵の平坦地から緩斜面にかけて集中している。特に竪穴住居跡とフラスコ状土坑は約10m程隔たり、ほぼまとまった範囲内に検出されている。遺物についてもこれらの遺構周辺から大多数が出土している。遺物から、これらの遺構は縄文時代中期後葉頃のものに比定される。大多数の遺構検出面は、第IV層の中振浮石層の上面とその下層面である。また、斜面部の第VI層上面で、斜面に沿って7基の土坑を検出している。検出面から縄文時代前期初頭から早期の時期のものと考えられる。以下に検出遺構について記述するが、炭窯に関しては現代の遺構であることから割愛した。溝跡に関しては文章記載のみにとどめた。

第1節 竪穴住居跡 (第3図～第11図)

前述のように、丘陵頂部と緩斜面部分に3棟を検出している。第3号～5号竪穴住居跡は、掘り込みも浅く、遺存状態はそれほど良いとはいえない。

第1号竪穴住居跡 (第3図～第5図)

[位置と確認] M-15・16グリッドに位置する。丘陵頂部から斜面部にかかる緩斜面に作られている。北側に第3号・第4号竪穴住居跡がある。第IV層面に暗褐色の不整なプランで検出した。

[平面形・規模] 平面形状は不整な楕円形で、規模は長軸4.5m、短軸3.6mの東西方向に長い。深さは、検出面から床面まで最大65cmである。

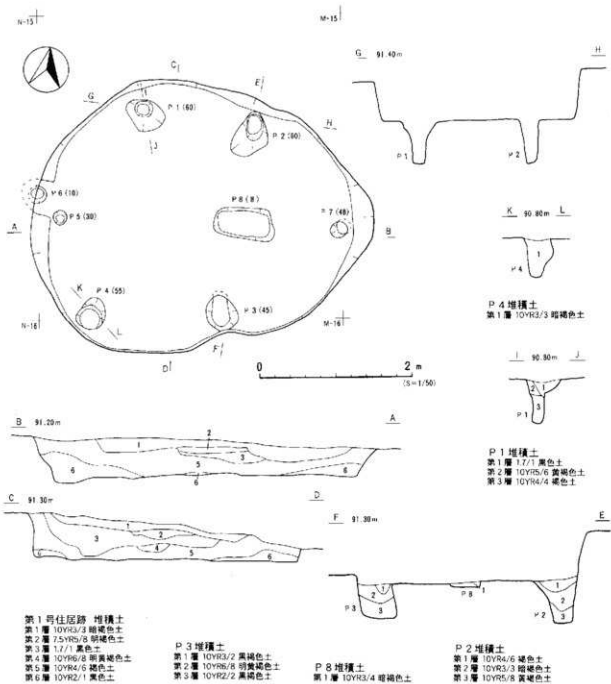
[堆積土] 褐色土を主体にした土で6層に分けられる。第2層は焼土であるが、面的に焼けていると判断されない。第5層中には、地山の粘質土が細ブロックで混入している。第6層は黒色土で、堆積状態から自然堆積と判断されるが、他の層は土質と堆積状況から廃棄された土と思われる。

[床・壁] 床面は僅かに起伏があるもののほぼ平坦である。住居中央から南側周壁にかけてやや硬化がみられる。壁は、南北側で床面からほぼ直に立ち上がるが、東西壁は開くように立ち上がっている。

[炉] 炉跡は検出されなかった。

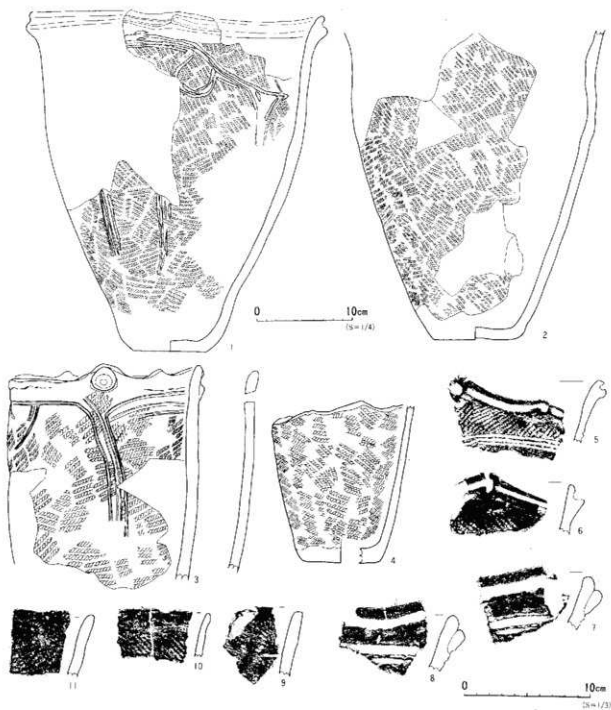
[柱穴・他] 住居内から7個の小穴と小土坑を検出した。小穴の形状は不整形と円形のものがある。深さは最大60cmで、浅いものは10cmである。このうち、配置と規模からP1～P4が住居の支柱穴であったものと考えている。また、P6とP7は住居の長軸方向の両端に、斜めに掘られて作られている。支柱穴との間隔もほぼ均一であることから、支柱となる斜め材の柱穴であったものと考えている。P6はP7に比べ深さがなく、P5が補助していた可能性も考えられる。P8とした小土坑は80cm×40cmの隅丸長方形で浅いものである。焼成はないが、配置から炉に関係したものの可能性がある。

[出土遺物] 土器：周壁に沿うように堆積土及び床面から第Ⅱ・Ⅳ群土器が破片にして176片出土した。Ⅱ-C類土器(4-1・3・5・6・8・7、5-1)、Ⅳ-E類土器(4-11・10・9・2・4、5-4・3)、Ⅳ-D類土器(5-2)、Ⅳ-F類土器(5-5)底部などに分かれる。4-1・2は色調・胎土ともに非常に似通っている。4-3の文様モチーフは4-1・2と同様に3条沈線を口縁に平行に



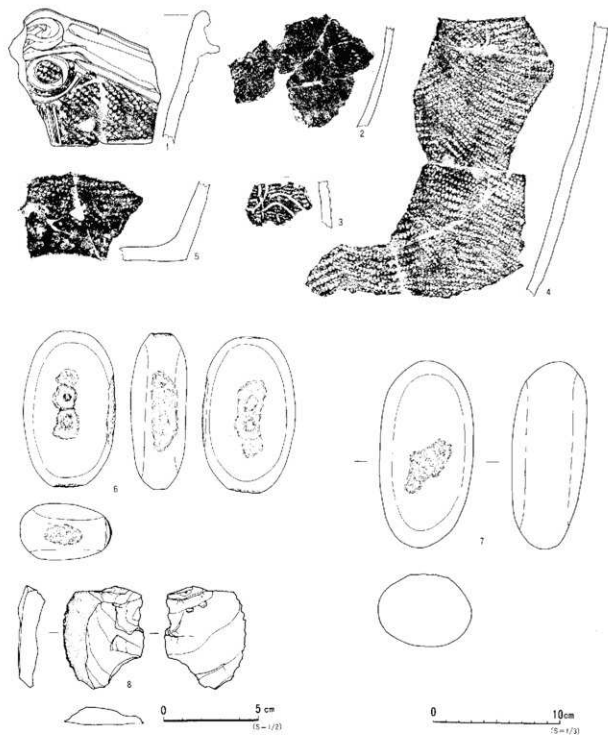
第3図 第1号竪穴住居跡

施し、そのまま沈線を垂下させている部分も見られる。4-4は縄文のみ施文した鉢である。4-6は口唇部下に無文部分がある。口唇部には1条沈線が巡り、波頂部で渦巻文を描く。4-8は隆帯を貼付け、その直下にも浅く広い平行沈線を2条巡らしている。4-7も同様に隆帯を貼り付けている。5-1は口縁部に隆帯を貼付けて沈線を1条つけたと思われる。波頂部の沈線は渦巻文を呈している。4-11は波状口縁と思われるが、4-9・10は不明である。4-10は口縁部がわずかに外反する器形である。5-4はLR縄文を多方向に回転施文している。5-2は外面を縦方向に幅約1cmの間隔で磨く。5-3はIII-Bの可能性もある。



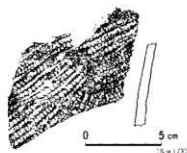
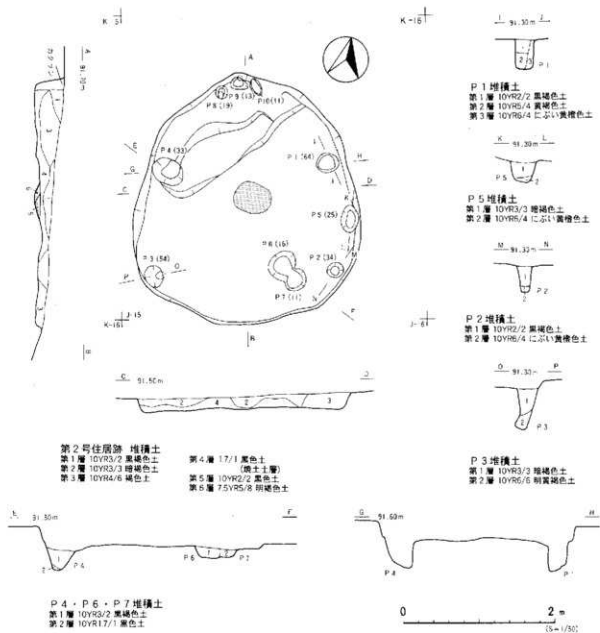
番号	位置	原料	分類	器種	部位	胎土	焼成	内面調整		備考	整理
								内面調整	備考		
1	1位	灰土	E-C	深鉢	底部	灰土砂粒	壁	1.3横位、非位一縦位、平行沈線2条、口下縁に透き文、口唇部に沈線	2.片手		K1
2	1位	灰土	IV-E	深鉢	底部	黄褐色砂粒	壁	1.3横位、非位一縦位、平行沈線2条、口下縁に透き文、口唇部に沈線	2.片手		K2
3	1位	灰土	III-C	深鉢	底部	黄褐色砂粒	壁	1.3横位、非位、縦線1条			K3
4	1位	灰土	IV-E	鉢	底部	灰土	壁	1.3横位、非位、2次焼成	1.片手		K4
5	1位	灰土	III-C	深鉢	口縁	灰土	壁	地文=口縁十字(口下-空線1条)	2.片手(口下)		10
6	1位	灰土	III-C	深鉢	口縁	灰土	壁	地文=口縁十字(口下-空線1条)	2.片手		8
7	1位	灰土	III-C	深鉢	口縁	黄褐色砂粒	壁	地文=口縁十字(口下-空線2条)			17
8	1位	灰土	III-C	深鉢	口縁	黄褐色砂粒	壁	地文=口縁十字(口下-空線2条)			9
9	1位	灰土	III-E	深鉢	口縁	砂粒-灰土	壁	1.横位-口下唇-内縁十字	十字(口下)		12
10	1位	灰土	III-E	深鉢	口縁	砂粒	壁	LR=口縁十字(口下)	十字		15
11	1位	灰土	III-E	深鉢	口縁	石灰・炭粉	壁	地文=口縁十字(口下)、山唇部-内縁十字(口下)	口縁十字(口下)		14

第4図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	位置	層位	分類	器種	部位	胎土	形状	表面	用途	表面調整	高さ	直径
1	1住	Ⅱ-C	灰鉢	口縁	砂粒・石灰	灰	口縁部一週を貼付・残部部に化粧					4
2	1住	Ⅱ-D	灰鉢	底		灰	三方弁			三方弁		7
3	1住	Ⅱ-E	灰鉢	底		灰	無紋・非対称板瓦又は瓦葺(底割)					19
4	1住	Ⅱ-E	鉢	底	砂粒	灰	1段縁部・斜紋			三方弁(砂子)		1
5	1住	Ⅱ-F	灰鉢	底		灰	深縁(口縁部一ナリ)底縁 不発			ナリ		6
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考			
6	1住	堆積土	燧石	147	75	60	942.9	安山岩				
7	1住	堆積土	燧石	124	73	44	519.8	安山岩				
8	1住	堆積土	削器・擦器用	54	43	14	24.6	埴貫頁岩				

第5図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)



第6図 第2号竪穴住居跡 出土遺物

石器；堆積土より敲石2点が出土した。(5-6・7)いずれも、楕円形でやや器厚のある自然礫を素材とする。石質は2点ともに安山岩である。5-6は、器面に3つの連続する深い凹み、側縁と端部に敲打痕を持つ敲石Ⅱ類である。5-7は器面のほぼ中央に敲打痕を持つ、敲石Ⅰ類である。P-4の堆積土中からは削器・插器Ⅲ類が出土した。(5-3)石質は珪質頁岩で、礫面を残す側縁に微細剥離を持つ。

〔小結〕床面出土遺物から縄文時代中期後葉複林式の住居跡と考えている。

番号	位置	層位	分類	形状	加工	粘土	構成	表面	用途	内部構造	備考	整理
1	2号住居跡	IV-E	深鉢	深鉢	深鉢		珪質頁岩	自然		ベツナデ		81

第2号竪穴住居跡（第6図）

〔位置と確認〕調査区北側J-15グリッドに位置する。丘陵頂部平坦面の切れ際に作られている。西側の3軒の竪穴住居跡から10m程離れてある。第IV層面に黒暗褐色の不整なプランで検出した。

〔平面形・規模〕平面形状は北側がすばまる不整な円形で、規模は南北約3.3m、東西約3mである。検出面から床面までの深さは20cm程である。

〔堆積土〕褐色土を主体にした土で4層に分けられる。全層に地山の粘質土が細ブロックで混入している。土質と堆積状況から廃棄された土と思われる。

〔床・壁〕住居南側の床面は平坦であるが、北側は起伏があり2段に低くなっている。周壁は床面からやや開くように立ち上がっている。

〔炉〕住居のほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は50cm×40cmの楕円形で、床面を10cm程の深さに掘り窪めた中で火が焚かれている。

〔柱穴・他〕住居内から10個の小穴を検出した。小穴の形状は円形と楕円形で、大きさは最大45cmから16cmである。深さは最大P1の64cmで、浅いものは10cm程である。形状は異なるもののP1とP3、P2とP4の深さは同じ位で、配置からP1～P4が住居の支柱穴であったものと考えている。また、P5は、P1とP2の中間に作られており支柱ないしは支柱穴の補助的柱穴であったものと思われる。

北側の周壁直下に作られたP8～P10は、規模的にほぼ同じで3個で機能していたものと考えている。

〔出土遺物〕床面から第IV-E類土器が1点出土した。第6図1は胴部片で単節LR縄文を横位に回転施文する。被熱による剥離が一部見られる。

〔小結〕床面出土遺物から縄文時代中期後葉榎林式の住居跡と考えている。

第3号竪穴住居跡（第7図・第8図）

〔位置と確認〕調査区北側の平坦部L・M-14・15グリッドに位置する。第1号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡に近接する。第IV層面で検出した。

〔平面形・規模〕やや南東に傾斜する地形のため、北・西壁の一部が残存する他は周壁が確認できなかったため、平面形は不明であるが、概ね不整円形または楕円形と思われる。周壁の残存部は西辺で約2.4m、北辺で約1.8mである。

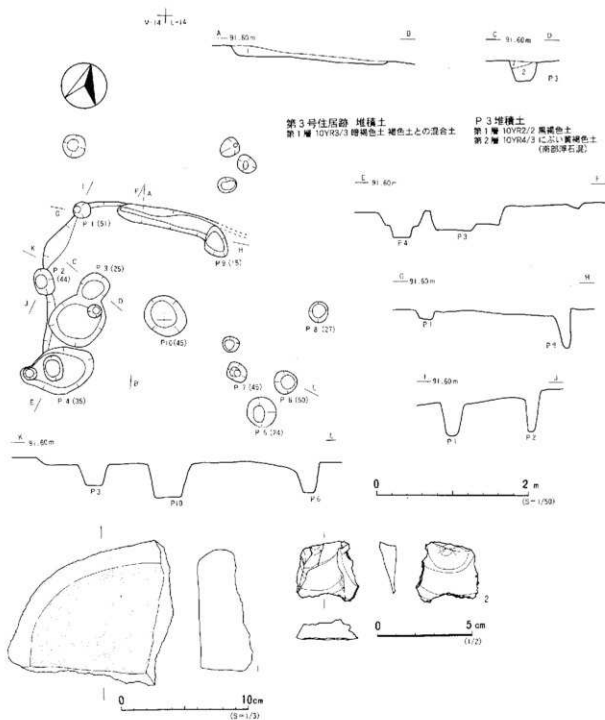
〔堆積土〕住居内堆積土は暗褐色土主体の単一層である。

〔床・壁〕床面は起伏が多い。第IV層面を床面にしている。遺存状態は極めて悪く、北壁、西壁で緩やかに立ち上がりが残る程度である。検出面からの壁は約10cmの高さであるが、明瞭でない。

〔柱穴〕住居内と思われる床面範囲から11個の小穴を検出した。P1・P2・P4・P6・P8は配置と規模、深さから支柱穴と考えられる。断面形状は台形と長方形である。床面からの深さはP8の最小27cmからP1の最大51cmで、平均すると約40cmの深さがある。P5とP7は規模と形状から柱穴に類する、補助的機能を持ったものと考えられる。P3とP10は住居の中央付近に位置し、50cm～80cmの規模をもつことから柱穴以外の用途も考えられる。

〔炉〕検出されなかった。

〔周溝〕北壁直下でわずかに確認された。残存部の幅20cm～24cm、深さは約10cmである。



第7図 第3号竪穴住居跡・出土遺物

〔出土遺物〕土器：堆積土から縄文土器1個体と土器片95片が出土した。IV-E類(8-1・2・3・4・5・6・9)、IV-C類(8-7)、II-C類(8-8・13・14)、IV-E類(8-10・11・12)色調は黒褐色である。どれも器面全体にススが付着している。口縁付近で緩く外反する器形である。8-4は口縁部に粘土をつけてナデ調整をしている。8-6は口縁がほぼ直立する器形である。縄文を回転軸

番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
1	3住	増積土	打石・石皿	(132)	(116)	(50)	464.9	安山岩	
2	3住 P-2	堆積土	削器・椀形皿	32	33	10	6.1	柱頁頁岩	

文した後、ヘラ状工具で器面を軽くなる。8-7は縄文施文後に口縁部を折り返している。口縁部に粘土をつけてナデ調整をしていることから、同一個体と思われる。8-13・14は縄文施文後に粘土を使って肉彫風線に線を浮き立たせている。文様は直線、弧状を描く。8-8は縦位の沈線が施されている。石器：堆積土から台石と石皿の欠損品が出土した。(7-1)石質は安山岩である。P12の堆積土から削器・搔器Ⅲ類が出土した。(7-2)石質は珩質頁岩で、器体の端部に微細剝離を持つ。

〔小結〕出土遺物が床面近くから出土しており、住居廃絶後に投棄された土器とも考えられるが、堆積状況を考慮すると時期差はあまりないと思われ、縄文時代中期後葉複林式の住居と考えられる。

第4号竪穴住居跡（第9図）

〔位置と確認〕調査区北側の平坦地N-14グリッドに位置する。第1号住居跡の北西、第3号住居跡の西に近接する。第Ⅷ層面で検出した。遺存状態は悪い。

〔平面形・規模〕やや南に傾斜する地形のため、北辺以外の壁は確認されなかったため、平面形、規模とも不明であるが、円形もしくは楕円形と思われる。北辺残存部の規模は約3mである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に分層される。黄褐色土主体で、炭化物が第1層と2層に混入する。

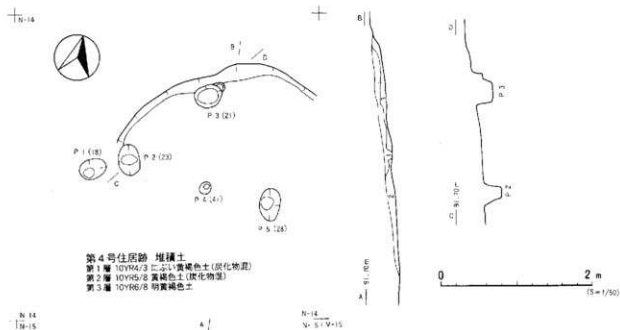
〔床・壁〕床面と思われる部分は起伏が多い。第Ⅷ層面でやや硬化した面を確認した。北壁に相当すると思われる部分がわずかに確認された。床面から7cm程の高さで立ち上がりは明瞭でない。

〔柱穴〕小穴を5個検出した。いずれも規模にバラツキがあり柱穴とは断定し得ない。

〔炉〕検出されなかった。

〔遺物〕出土しなかった。

〔小結〕検出状態と硬化した床面から住居跡に含めた。遺存状態がわるく、出土遺物もないことから断定できないが、前述の各竪穴住居跡とほぼ同時期と考えられる。



第9図 第4号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡（第10図・第11図）

〔位置と確認〕 調査区北側の平坦地 J・K-7・8グリッドに位置する。住居跡南東側にカクラン痕が見られた。第Ⅷ層面で検出した。遺存状態は悪い。

〔平面形・規模〕 東側に傾斜する地形で、遺存する壁は南辺約1.6m、北辺約1m、西辺約4.6mであり、ほぼ不整楕円形となるものと思われる。

〔堆積土〕 2層に分層される。第1層中には炭化物が混入する。第2層中には南部浮石が混合する。

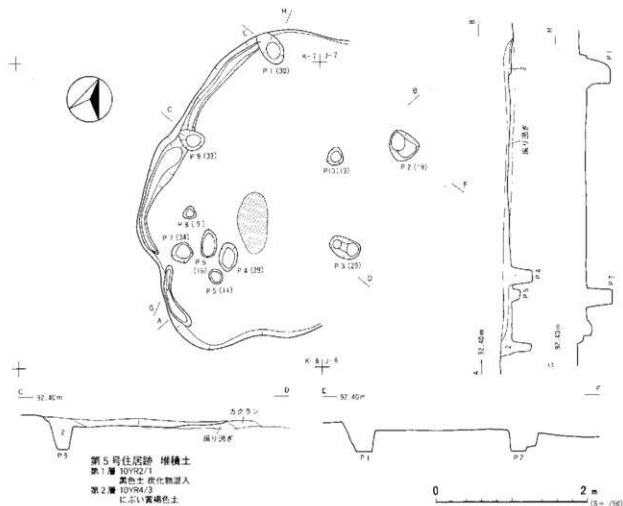
〔床・壁〕 床面はやや起伏があるが、ほぼ平坦である。第Ⅷ層を床にしている。北壁で14cm～18cm、西壁で13cm～28cm程である。

〔柱穴〕 遺存する壁の内側から、10個の小穴を検出した。P1からP4、P9は主柱穴と思われる。また、P6とP7は形状と深さから、主柱穴の補助的機能を持つと思われる。

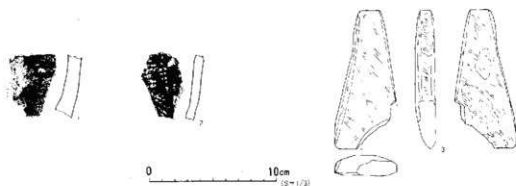
〔焼土〕 長軸70cm、幅40cm程度の範囲で検出した。

〔周溝〕 西壁直下に巡っている。最大幅30cmで深さ6cm～17cmである。

〔出土遺物〕 土器：住居内堆積土からⅣ-D類土器2片を出土した。(11-1・2)いずれも胴部片である。1は底部付近の破片と思われ、下部で断面が厚くなる。1と2は色調・胎土等の違いから、異なった個体と思われる。



第10図 第5号竪穴住居跡



番号	住居	層位	分層	遺物	部位	出土	施設	器名	内山調査	備考	整理
1	5住	堆積土	IV-D	深鉢	柄		壁	ミダ木(柄)			1
2	5住	堆積土	IV-D	深鉢	柄		壁	ミダ木(柄)			2
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考		
3	5住	床面	磨製石斧	110	(49)	16	133.4	緑色凝灰石			

第11図 第5号竪穴住居跡出土遺物

石器：床面から磨製石斧が1点出土した。(11-3)石質は緑色凝灰岩である。刃部の一部を欠損するが、残存する形状から片刃の石斧であったと思われる。

【小結】堆積土出土遺物から、縄文時代中期後葉頃の住居跡と思われる。

第2節 土坑 (第12図～第18図)

本調査では総数18基の土坑が検出された。主に調査区の北側丘陵の頂部である緩斜面に集中して検出したほか、斜面部にはほぼ等間隔で構築されているものもある。時期的には、出土遺物や検出面から、縄文時代中期後葉に比定されるものと前期初頭ないし早期に比定されるものがある。これらの土坑は断面形態で、円筒形、フラスコ状、方形、溝状、その他のものの5種類に分けられる。この特徴から以下に、円筒形、フラスコ状、方形、溝状、その他の土坑の順に記述するが、検出時には一括して検出順に番号を付したため、土坑番号は昇順に明記していない。

第7号土坑 (第12図)

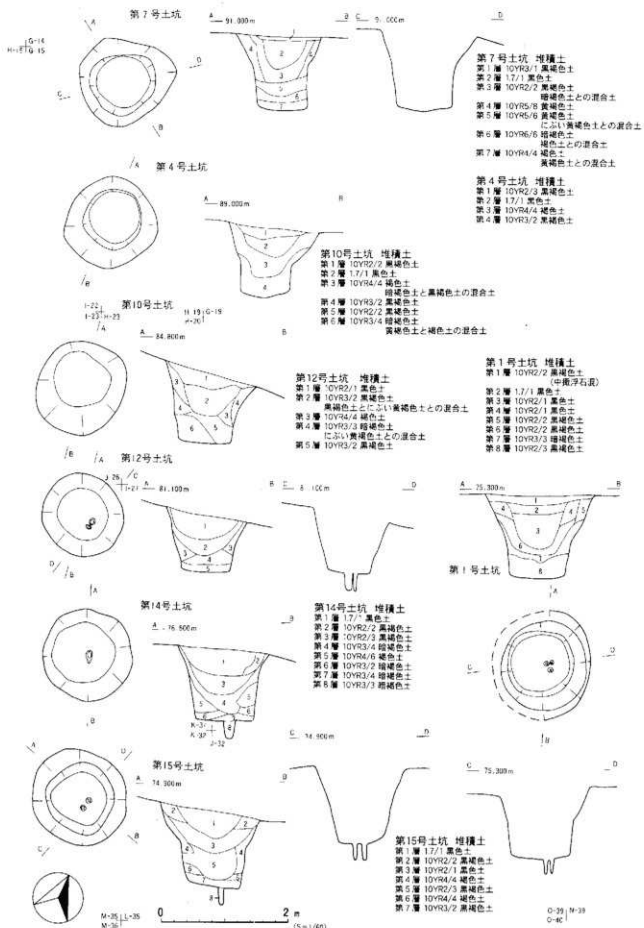
【位置と確認】調査区北側の平坦地G-15グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模]長軸1.5m、短軸1.4mの不整形円形である。確認面からの深さは約1.2mである。[堆積土]7層に分層される。上位は黒色土と黒褐色土を、下位は黄褐色土を主体とする。[底面・壁]壁は底面からはほぼ直に立ち上がり、中位から緩く外反する。底面はほぼ平坦である。

第4号土坑 (第12図)

【位置と確認】調査区中央の傾斜地H-19グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模]長軸1.5mの円形である。確認面からの深さは1.2mである。[堆積土]4層に分層される。黒褐色から黒色土が主体で全体に南部浮土が混入する。[底面・壁]底面はやや起伏がある。壁は底面からほぼ直に立ち上がり、中位から外反する。

第10号土坑 (第12図)

【位置と確認】調査区中央H-I-23グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模]



第12図 土坑(1)

長軸1.6m、短軸1.4mの円形である。確認面からの深さは1.2mである。[堆積土] 6層に分層される。黒褐色土が主体で全体に南部浮石が混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに外反する。

第12号土坑 (第12図)

[位置と確認] 調査区中央の傾斜地J-27グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模] 約1.3mの円形である。確認面からの深さは約1mである。[堆積土] 5層に分層される。黒色土と黒褐色土を主体にし、全体に南部浮石が混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は底面から外反して立ち上がる。底面の中央から南東寄りに径が10cm、深さ30cm程度の小穴を2個検出した。

第14号土坑 (第12図)

[位置と確認] 調査区中央の傾斜地K-31グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模] 約1.4mの円形である。確認面からの深さは約1.2mである。[堆積土] 8層に分層される。黒色土と黒褐色土が主体で、第1層に南部浮石が多く混入する。[底面・壁] 壁は底面から垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。床面の中央に径が20cm、深さ約30cmの小穴を1個検出した。底面は小穴の周辺が若干高まっており、その他はほぼ平坦である。

第15号土坑 (第12図)

[位置と確認] 調査区南側M-35グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模] 径が約1.6mのほぼ円形である。確認面からの深さは1.2mである。[堆積土] 8層に分層される。黒色土と黒褐色土が主体で第1層に南部浮石を多く混入する。[底面・壁] 底面は南側に傾斜している。壁は底面から直に立ち上がり、開口部付近で外反する。床面の中央南寄りに径が10cm、深さ25cmの小穴を2個検出した。

第1号土坑 (第12図)

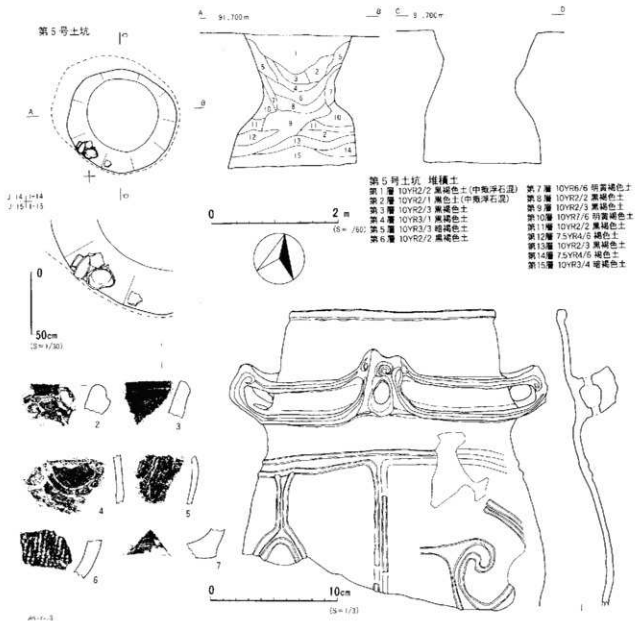
[位置と確認] 調査区南側の傾斜地N・O-38・39グリッドに位置する。第Ⅷ層面で検出した。[平面形・規模] 径が約1.7mのほぼ円形である。確認面からの深さは1.2mである。[堆積土] 8層に分層される。黒褐色土が主体である。上位層に南部浮石が混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。床面の中央東寄りに径が6cm～8cm、深さ約20cmの小穴を3個検出した。壁は底面からほぼ直に立ち上がり、中位から緩やかに外反する。

第5号土坑 (第13図)

[位置と確認] 調査区北側の平地I-14グリッドに位置する。第Ⅳ層面で検出した。[平面形・規模] 開口部は約1.7mのほぼ円形、底面長軸2.1m、短軸1.7mの楕円形である。検出面からの深さは約2.1mである。[堆積土] 15層に分層される。7層以下は壁の崩落土と黒色土の混合土と思われる。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は、中位が内側に張り出したフラスコ状である。

[出土遺物] 堆積土及び底面より縄文時代中期後半の土器が1個体と土器47破片出土した。II-C類(第12図1・4・2)、II-E類(第12図3)、IV-E類(第12図7)12-1は橋状把手を口縁部に貼り付けた深鉢である。胴部文様には粘土を貼り付けている。把手部には沈線で渦巻が描かれている。12-2は口縁部に隆帯を貼付て沈線を施すと思われる。12-3は口唇部を外削ぎしている。12-6・4・5は胴部片で、12-6・5は断面が厚く、胎土も緻密である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代中期後葉の椀林式に構築されたと思われる。



番号	功高	層位	分佈	形類	部位	形状	外 形 詳 細		内径測定	数量	整理
							材 質	備 考			
1	S土	底面	B-C	深鉢	胎壳形	整	胎土粘付(灰化)、横状把手、器面磨光	3分半	134月	K7	
2	S土	堆積土	B-C	深鉢	口縁	整	胎土粘付(灰化)	2分半		3	
3	S土	堆積土	B	深鉢	口縁	整	口縁外縁(十字)			5	
4	S土	底面	B-C	深鉢	底	整	器底(灰化)、磨光		13.1月	4	
5	S土	堆積土	B-C	深鉢	胎	整	胎土粘付(灰化)	3分(胎口)		6	
6	S土	堆積土	B-C	深鉢	胎	整	胎土粘付			2	
7	S土	堆積土	B-Y	深鉢	底	整	胎土粘付(灰化)			1	

第13圖 土坑(2)・出土遺物

第8号土坑 (第14図～第16図)

〔位置と確認〕 調査区北側の傾斜地I-16グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 開口部で径約1.2mの円形、底面は長軸1.9m、幅1.8mの楕円形である。検出面からの深さは1.6mである。〔堆積土〕 17層に分層される。黒褐色～黒色土主体である。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は凹凸を有し、内傾しながら立ち上がり、開口部付近で垂直になるフラスコ状である。

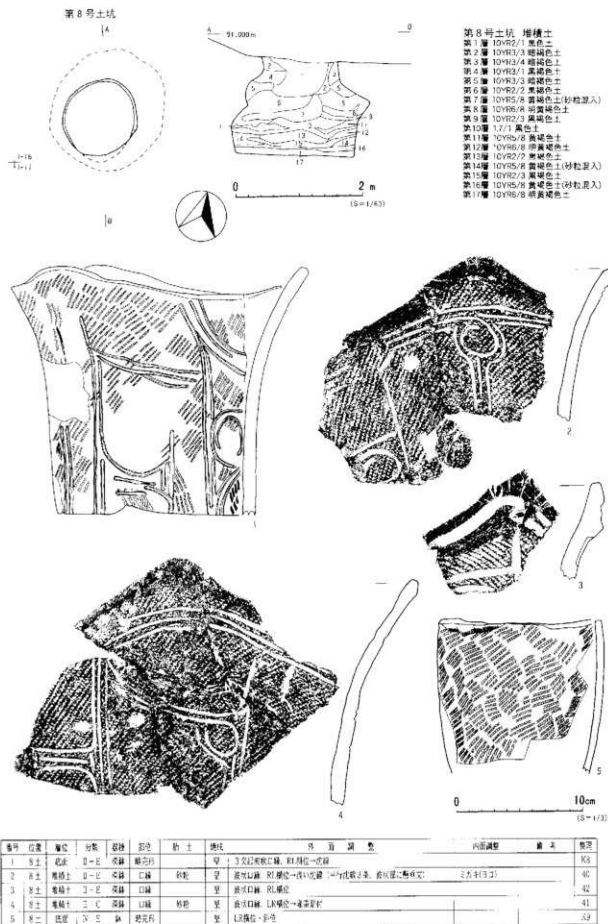
〔出土遺物〕 土器：堆積土及び底面より縄文土器165片が出土した。Ⅱ-C類 (14-4、15-12)、Ⅱ-E類 (14-1・2・3)、Ⅳ-E類 (15-3、14-5、15-1・2・4・5・6・7・8)、Ⅱ-D類 (15-9・10・11・14・16)、Ⅳ-E類 (14-4、15-13・15、16-1・2・3は胴部片) Ⅳ-F類 (16-4・5) 14-1は3つの波状部を持つ土器である。14-4は波状口縁で縄文施文後、口縁部に隆帯を貼付、沈線を1条入れる。波頂部は渦巻文を描く。15-12はキャリバー状の器形の屈曲部分で縄文施文後に横位に展開する弧状・渦巻文を構成している。内面全体を丁寧になでている。14-2・3は波状口縁で縄文施文後、横位に3条沈線を巡らし、その他、弧状、縦位の沈線で文様を構成する。口唇部はナデ調整のみである。15-9・10・11は接合しないがいずれも同一個体と思われる。器形は口縁部から口頸部にかけて外側に緩く外半する。口縁部と胴部の境界に隆帯を貼り付け、その直下に胴部の最大径がくると思われる。15-14は縄文施文後、縦位に沈線を2条つける。その沈線間に工具で斜めに文様を入れる。16-5は2つの波状部を持つと思われる土器で、縄文施文後、波頂部の下に径7mm程度外面から片面穿孔している。縄文施文の後、口縁部を丸めて、横方向になでている。15-2は口縁直下に横位の沈線を施す。15-4はほぼ直立する器形である。15-8は口縁部が外傾する器形である。屈曲部まで縄文を施文し、口縁部は粘土を使用して横方向になでている。15-15、16-2・3・1は胴部片で色調は黄褐色から褐色である。16-4は胴部に縄文施文し、底部付近を横位になでている。16-5は底部付近まで縄文を施文後、底外面を調整している。調整した際の粘土屑が胴部に見られる。石器：堆積土より蔽き石I類が出土した。石質は安山岩である。器体の周縁を全周する蔽打痕を持つ。

第9号土坑 (第17・18図)

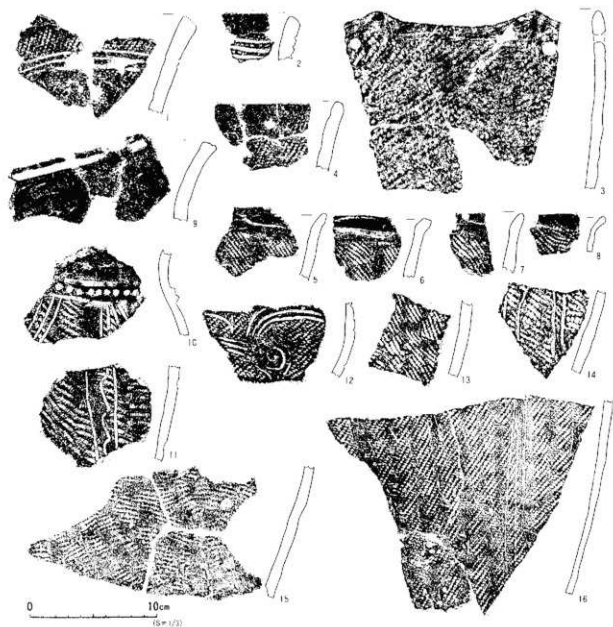
〔位置と確認〕 調査区北側の平地地H-I-16・17グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 開口部長軸1.6m、幅約1.3mの楕円形で、底面は約2mの円形である。検出面からの深さは約1.7mである。〔堆積土〕 11層に分層される。5層以下はローム主体の層で人為堆積によるものと思われる。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな括れをもつフラスコ状である。〔出土遺物〕 堆積土より第Ⅳ-F類土器1片が出土した。(18-3)

第2号土坑 (第16・17図)

〔位置と確認〕 調査区北側の平地地N-13グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 開口部は不整形形で長軸1m、幅90cm、底面は楕円形で長軸1.3m、幅1.2mである。検出面からの深さは80cmである。〔堆積土〕 6層に分層される。全体に南部浮石・炭化物が混入し、人為堆積の可能性もある。〔壁・底面〕 底面はやや起伏がある。壁は上位で張り出すフラスコ状である。〔出土遺物〕 (土器) 堆積土より土器10片が出土した。Ⅳ-E類 (16-9) は一部欠けているが、口唇部が丸くなる器形である。Ⅳ-E類 (16-6・7・8・10・11) は胴部片である。16-9・8・6は同一個体と思われる。石器：堆積土より磨石Ⅲ類が出土した。石質は頁岩である。磨面の欠損部に蔽打痕を持つことから、欠損後も再利用したものと思われる。

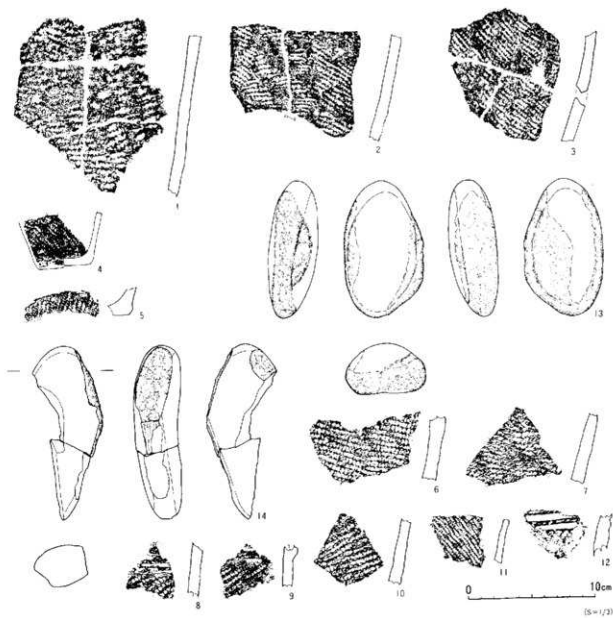


第14图 土坑(3)・出土遺物



番号	土器	部位	分類	器種	素材	製土	形状	内面装飾	備考	数量
1	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 約15cm, 地文→平行成線3条, 口縁部露取り, 外面ヘラナデ			28
2	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り, 地文→平行成線3条	ナデ(空)		24
3	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位→ヘラナデ, 穿孔			2
4	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り	ナデ		29
5	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位	ミガキ(漆)	14-5-1同-	26
6	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位→埴輪取付→ナデ(漆)		14-5-7同-	22
7	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位→埴輪取付→ナデ(漆)	ミガキ(漆)	14-5-7同-	23
8	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り→地文	ナデ(漆)		22
9	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り		14-5-7同-	29
10	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り		14-9と同-	20
11	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			19
12	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			25
13	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			17
14	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			13
15	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			27
16	8土	埴輪上	IV-E	漆鉢	口縁	空	斜横位 口縁部露取り			28

第15図 土坑(4)・出土遺物



番号	位置	層位	分類	図種	出土	形状	材質	調査	内部調査	備考	数量
1	8土	堆積土	V-E	漆器	別	等	土器(紅土)	漆器			21
2	8土	堆積土	V-E	漆器	別	石	土器	漆器			26
3	8土	堆積土	V-E	漆器	別	等	土器(紅土)	漆器			23
4	8土	堆積土	V-E	漆器	別	等	土器(紅土)	漆器			18
5	8土	堆積土	V-E	漆器	別	等	土器(紅土)	漆器			2
6	2土	堆積土	IV-E	漆器	別	赤色砂	土器	漆器			1
7	2土	底面	IV-E	漆器	別	等	土器(紅土)	漆器			2
8	2土	堆積土	IV-E	漆器	別	赤色砂	土器	漆器			5
9	2土	堆積土	IV-E	漆器	二珠	赤色砂	土器	漆器			4
10	2土	堆積土	IV-E	漆器	別	等	土器	漆器			3
11	2土	堆積土	IV-E	漆器	別	等	土器	漆器			7
12	2土	堆積土	IV-E	漆器	別	等	土器	漆器			1
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	深さ(mm)	重量(g)	石質	備考		
13	8土	堆積土	礎石1	118	63	39	380.0	安山岩			
14	2土	堆積土	礎石1	(137)	(65)	37	246.7	頁岩			

第16図 土坑(5)・出土遺物

第6号土坑 (第17・18図)

【位置と確認】 調査区北東側の平坦地H-14・15グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 開口部長軸で1.9m、幅約1.1m、底面長軸2m、幅約1.3mの楕円形である。検出面からの深さは約1.1mである。[堆積土] 13層に分層される。9層以下は黄褐色土と黒褐色土との互層で人為堆積の可能性がある。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は中位に緩やかな括れを有するフラスコ状である。[出土遺物] 底面から石匙1類が出土した。石質は珪質頁岩で、両面から周縁調整により刃部を作出する。

第3号土坑 (第17・18図)

【位置と確認】 調査区北西側の平坦地O-10・11グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 開口部長軸1.3m、幅約1.2mの円形である。検出面からの深さは25cmである。[堆積土] 2層に分層される。黄褐色土主体である。[底面・壁] 底面は起伏が多い。壁は底面から緩やかに立ち上がる。[出土遺物] 堆積土より第IV-E類の土器2片が出土した。18-2は縄文施文後、縦位に縄の結節部を押し込んでいる。1は胎土に黄褐色砂粒と赤色砂粒を多く含む。

第11号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区北側の平坦地L-12グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 径約60cmの不整形円形である。検出面からの深さは24cmである。[堆積土] 黄褐色土の単層である。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は底面から垂直に立ち上がる。

第13号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区北東側の平坦地G-15グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 開口部長軸1.2m、幅約80cm、底面長軸1.3m、幅90cmの楕円形である。検出面からの深さは35cmである。[堆積土] 4層に分層される。全体に中振浮石を多く混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦だが、南東方向に傾斜する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、南西側では底面付近が外側に拡がる。

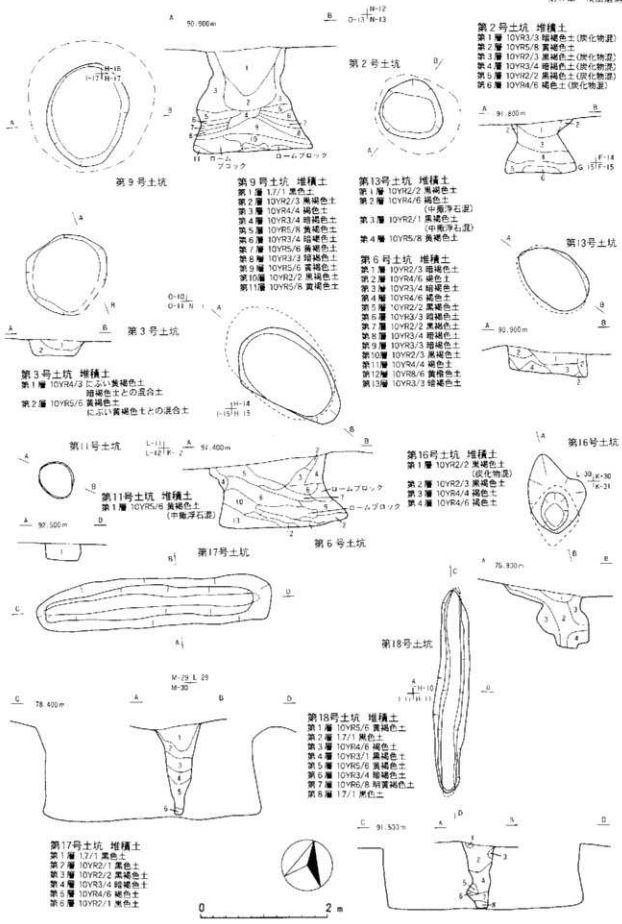
第16号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区中央L-30・31グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 開口部は長軸1.3m、幅90cmの楕円形で、底面は約40cmの円形である。検出面からの深さは90cmである。

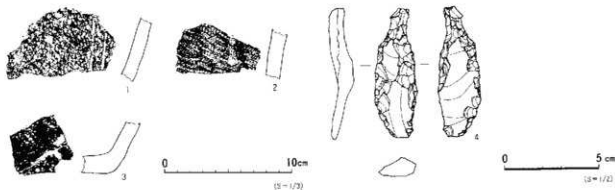
[堆積土] 4層に分層される。褐色土主体である。[底面・壁] 底面はやや起伏がある。壁は開口部上位で内側に大きく張り出し、下位では括れが多い。

第17号土坑 (第17図)

【位置と確認】 調査区中央の傾斜地L・M-29グリッドに位置する。傾斜地にほぼ平行である。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は細い楕円形で、開口部長軸3.7m、幅80cm、底面長軸3.4m、幅約20cmである。検出面からの深さは1.4mである。[堆積土] 6層に分層される。黒褐色土を主体の自然堆積で全体に中振浮石を混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面付近で内側に向かって緩やかに立ち上がり、上位で外側に開く。短軸方向の断面はV字形である。



第17図 土坑(6)



品目	位置	層位	分類	材質	形状	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考	整理
1	3上	堆積土	片-E	燧石	片					整	12号坑	1
2	3上	堆積土	片-E	燧石	片					整	12号坑の燧石欠	2
3	2上	堆積土	片-D	燧石	片					整	12号坑のナデ	
品目	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考			
4	6上	底面	心器I	70	23	13	12.5	種石負岩				

第18図 土坑(7)出土遺物

第18号土坑 (第17図)

[位置と確認] 調査区北側の平地地H-10・11グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。開口部の長軸3.2m、幅50cm、底面の長軸3.3m、幅約20cmである。検出からの深さは1mである。[堆積土] 6層に分層される。黒褐色土が主体の自然堆積で第3層、第5層と第6層は壁の崩落土と思われる。[底面・壁] 底面はやや起伏が見られる。長軸方向の断面では、壁は底面から内傾ぎみに立ち上がり、開口部付近で外側に開く。短軸方向の断面では、壁はU字形だが、崩落により一部括れが見られる。

第3節 掘立柱建物跡 (第19図)

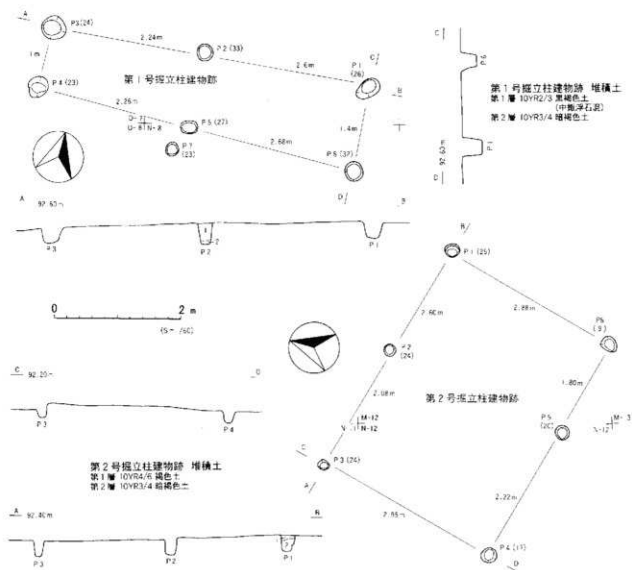
掘立柱建物跡は、調査区北側の丘陵頂部平地地で2棟検出された。時期については不明である。

第1号掘立柱建物跡

[位置と確認] 調査区北西側の平地地N・O-7・8グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 桁行約4.9m、梁間約1.3mの2間1間の建物跡である。[堆積土] 小穴2の堆積土は黒褐色土主体の2層に分層される。柱痕は検出できなかった。[柱穴] 各柱穴の平面形は円形または楕円形であり、深さは22～33cmである。断面形は長方形である。

第2号掘立柱建物跡

[位置と確認] 調査区北側の平地地M・N-11・12グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 桁行約3.8m、梁間約2.9mの2間1間の建物跡である。[堆積土] 小穴3の堆積土は褐色土主体の2層に分層される。柱痕は検出できなかった。[柱穴] 各柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さは9～25cmである。断面形はほぼ長方形である。



第19図 孤立柱建物跡

第4節 溝跡

調査区南端部付近で検出された。時期の断定はできないが、堆積土から平安時代以降のものである。

第1号溝跡

[位置と確認] 調査区南側の傾斜地N・O-47~50グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[規模] 幅40~70cmで、深さ7~23cmである。検出された長さは11.5mあり、調査区外へ伸延している。
[堆積土] 黒色土主体の単層である。

第3章 遺構外出土遺物

第1節 縄文土器・弥生土器（第20図～第24図）

遺構外出土の土器は破片数にして2,289点で、グリッドライン14～17付近の緩斜面に集中して出土した。最も土器片が出土した層位は第IV層である。縄文時代中期から後期にかけての、縄文のみを回転施文した土器が多く出土している。

第I群土器 縄文時代前期の土器

A類 円筒下層式に相当する土器 (20-1・4)

胴部下半で、縄文を密に施文している。20-1は中稜浮石の直下から出土した。

第II群土器 縄文時代中期の土器

A類 円筒上層a式に比定される土器 (20-2・3)

20-2・3は口縁部から頸部にかけてのもので、隆帯上に刻目、頸部に燃糸の圧痕が見られる。

B類 円筒上層式に相当する土器 (20-5)

円筒上層式の胴部片と思われる。結束第1種LR縄文を横位に施文する。色調はにぶい黄褐色である。

C類 椀林式に比定される土器 (20-6～12、21-1～9)

波状口縁で、口縁部隆帯に1条の沈線をつける。胴部文様は単節RL・LRを横位・斜位に回転施文する。色調は概ね赤褐色から明褐色で、胎土は砂粒の混入が目立つ。焼成はやや良好である。波状口縁の波頂部で、隆帯上の沈線は渦巻文を描く。(20-6・8・10・7) 円形文を描くものもある。(20-9) 波頂部がやや丸味を持つ口縁部形態で、波頂部の沈線は蕨手状の渦巻文を描く。(20-8) 波状口縁だが、沈線を持たず、波頂部に刺突がある。(20-11、21-1) 21-1・8・9は同一個体である。波頂部を持たない口縁部片である。(21-2・3・4・5・6・7) 波状口縁と思われるが、口縁部の残存が少ないため詳細は不明である。隆帯を意識しながらも貼付などは見られず、口唇部をつまみ出して隆帯状にしている。(21-3・4・5) 21-5は沈線の代わりに単節LRが1条施文される。

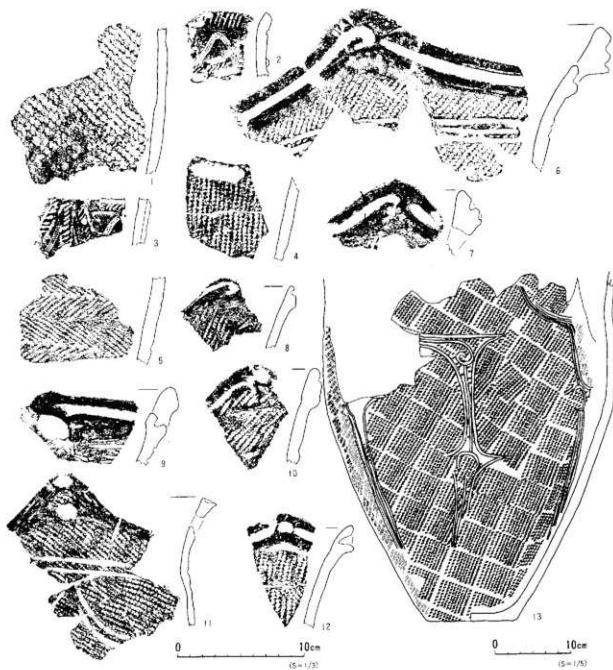
21-8・9は胴部片である。胴部上半の緩く屈曲した部分と思われる。横位に施された沈線から垂下して弧を描くものと思われる。

D類 最花式に比定される土器 (21-10～18、24-1)

口縁部から口頸部にかけて無文帯を持ち、口縁部と胴部の境界に刺突文を横位につける。縦位に2条または3条の沈線を持つ。全体的に色調は褐色から明赤褐色である。21-10は頸部から胴部にかけての破片である。横位に刺突を施し、その直下に平行沈線をつける。いずれも波状口縁で、口唇部を外削ぎし、横位の平行沈線を口縁部下に施す。(21-13・11・12) 21-11は波頂部から垂下して2条の沈線が施される。縦位の3条沈線(21-16・14・15、22-1)・2条沈線(21-17)を施す胴部片である。17は2条沈線の間に波状沈線を施文する。後期の土器になる可能性もある。

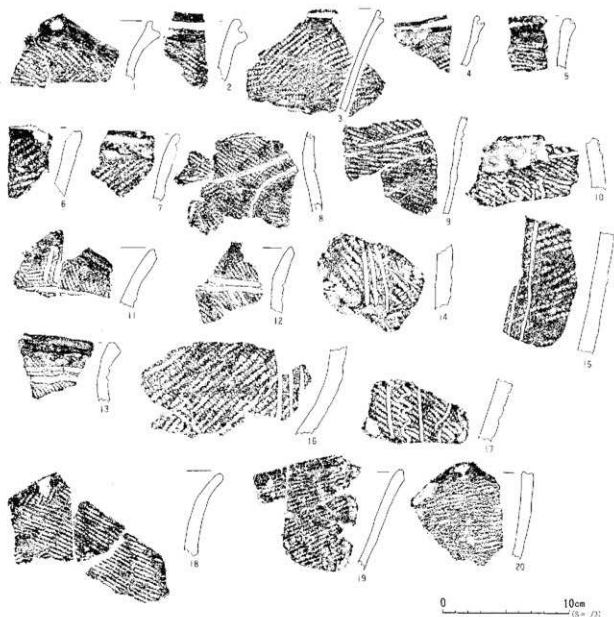
E類 縄文時代中期後葉に相当する土器 (21-16～18、22-1～5)

波状口縁または平縁で、口縁部に隆帯を持たない。椀林・最花式のいずれかに属する可能性が高い。胎土は黄褐色の砂粒を多量に混入し、焼成はやや軟質である。口縁部が外傾し、屈曲部を境に縄文の



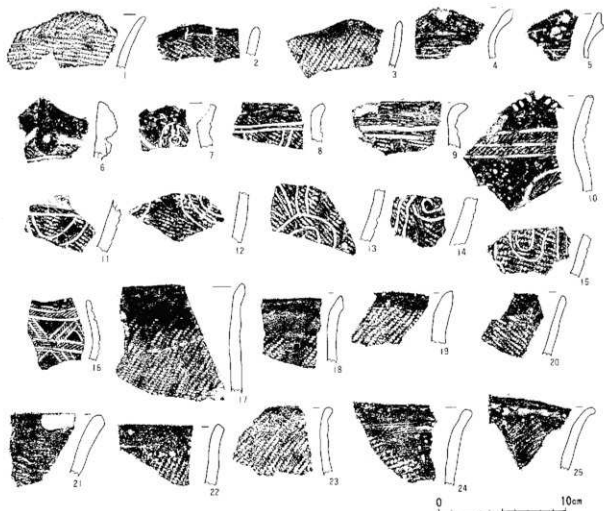
番号	位置	形状	分類	器種	部位	土質	施文	外 形	装 飾	内面装飾	出 土	層位
1	J-1	片断	I-A	深鉢	胴-底	砂粒・凝結	整	短筒形	褐色斑點文			a2
2	L-42	片断	II-A	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部に灰白土・黒土・赤土を施す			19-3と同一	74
3	L-42	片断	II-A	深鉢	胴	砂粒	整	胴部赤土・黒土を施す			19-2と同一	51
4	Q-17	片断	I-A	深鉢	胴	凝結	整	口縁部				220
5	K-10	片断	II-A	深鉢	胴	砂粒	整	口縁部	緑褐色	ナデ		202
6	N-13	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色	ナデ		225
7	O-13	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色		19-13同	23
8	J-17	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			15
9	T-5	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			32
10	M-18	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			53
11	O-12	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			11
12	N-14	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			45
13	N-12	片断	II-C	深鉢	口縁	砂粒	整	口縁部	褐色			19-11同

第20図 遺跡外出土土器(1)



番号	位置	層位	分類	器種	形状	土質	特徴	器 器 調 整	内面調整	備 考	数量
1	O-12	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁	粘粉質	整	面灰白緑。口縁部→口縁下に深線2条。		20-8.測筒	38
2	I-14	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁		整	1.灰緑色→1.灰緑色帯帯、十字			70
3	L-19	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁	砂粒	整	1.灰緑色→黄褐色(底赤)条	ナシ		26
4	N-20	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁		整	1.緑→1.黒緑地→黒褐色、斜線→1.黒緑(以下)条群			40
5	N-10	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁		整	1.灰緑色→1.緑褐色(口縁部)に黄褐色の条(変色)と点文			46
6	I-18	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁		整	1.灰緑色→黄褐色斜紋			14
7	K-10	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁	赤色砂粒	整	1.灰緑色→1.黒褐色下に斜線斜紋、灰線1条	ナシ(測筒)		34
8	N-14	Ⅱ層	B-C	深鉢	口縁		整	2.灰緑色→1.灰緑色	ナシ(測筒)	20-1.測筒	133
9	O-12	Ⅱ層	B-C	深鉢	胴	黄褐色	整	2.灰緑色→1.灰緑色条	ナシ(測筒)	20-8.1筒	126
10	M-17	Ⅱ層	B-D	深鉢	胴		整	1.灰緑色→1.黒褐色、上部に黄褐色、下部に1.黒褐色斜紋。	ナシ		151
11	O-12	Ⅱ層	B-D	深鉢	口縁		整	黄灰口縁、1.灰緑色→1.灰緑(口縁部)に黄褐色(ナシ)			57
12	P-15	Ⅱ層	B-D	深鉢	口縁	砂粒	整	1.灰緑色→1.灰緑帯平行2条			122
13	O-12	Ⅱ層	B-D	深鉢	口縁	黄褐色	整	1.灰緑色→1.黒褐色(口縁部)に斜紋(測筒状)、半与成帯2条	ナシ(測筒)		56
14	M-21	Ⅱ層	B-D	深鉢	胴	粘粉・石英	整	1.灰緑色→1.灰緑条			217
15	M-15	Ⅱ層	B-D	深鉢	胴	黄褐色	整	1.灰緑色→1.灰緑条	ナシ(測筒)		212
16	L-13	Ⅱ層	B-D	深鉢	胴	黄褐色	整	1.灰緑色→1.灰緑条	ナシ		205
17	S-11	Ⅱ層	B-D	深鉢	胴		整	2.灰緑色→1.灰緑条2条、その間に黄褐色			209
18	O-12	Ⅱ層	B-E	深鉢	口縁		整	1.灰緑色→1.黒褐色、斜線斜紋(口縁部)に黄褐色			53
19	K-15	Ⅱ層	B-E	深鉢	口縁		整	黄灰口縁、1.灰緑色、1.黒褐色(口縁部)に黄褐色	ナシ		4
20	M-18	Ⅱ層	B-E	深鉢	口縁	粘粉・石英	整	黄灰口縁、1.灰緑色、突起部2条斜紋	ナシ(測筒)		215

第21図 遺構外出土土器(2)



(56-1/3)

番号	位置	層位	分類	器種	部位	形状	表文	器名調査	内部調査	備考	巻数
1	M14	IV層	C-E	深鉢	口縁	笠	放射状線→L線縁部、口縁部に横文付の施文				45
2	M15	IV層	B-E	深鉢	口縁	笠	放射状線、L線縁部→口縁部に十字		ミズ利(三二)		107
3	M15	V層	B-E	深鉢	口縁	笠	放射状線、L線縁部→口縁部十字		ミズ利(三二)		37
4	K-5	IV層	B-E	深鉢	口縁	笠	放射状線、口縁部十字		ミズ利(三三)		32
5	K15	IV層	B-E	深鉢	口縁	笠	放射状線、表文部に十字の施文		十字(三)		31
6	P-5	前期	B-A	深鉢	口縁	笠	放射状線、口縁部十字、十字の施文				15
7	P15	中期	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、放射状線より十字		十字		121
8	M14	IV層	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→放射状線十字		十字(三)		106
9	Q15	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→十字				80
10	M20	IV層	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、口縁部に放射状線、L線縁部		十字(三)		111
11	P11	V層	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→放射状線			24-12.13期	118
12	P11	V層	B-E	深鉢	口縁	笠	L線縁部→放射状線				119
13	P11	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→放射状線			24-14.15期	117
14	P12	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→十字			ミズ利	23
15	M18	V層	B-B	深鉢	口縁	笠	L線縁部→放射状線十字		十字(三)		95
16	M24	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、L線縁部→放射状線				113
17	L-21	V層	B-A	深鉢	口縁	笠	放射状線				5
18	L16	V層	B-A	深鉢	口縁	笠	放射状線			十字	33
19	Q10	前期	B-A	深鉢	口縁	笠	放射状線、放射状線より十字		十字(三)		48
20	L10	前期	B-A	深鉢	口縁	笠	L線縁部、口縁部→十字		十字(三)		64
21	O10	前期	B-A	深鉢	口縁	笠	L線縁部→口縁部十字		十字		61
22	L18	IV層	B-A	深鉢	口縁	笠	L線縁部、口縁部十字		十字		28
23	N17	IV層	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、放射状線より十字				77
24	L15	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、放射状線より十字				71
25	P10	前期	B-B	深鉢	口縁	笠	放射状線、放射状線より十字				67

第22図 遺構外出土土器(3)

回転方向を変えて施文している。(21-18、22-1) 口唇部に無文部分を設けている。(21-19・20、22-2・3) 21-20は波頂部の口唇上に窪みをつけている。22-4・5は口縁部が外反する器形であり、口縁部直下に幅広の無文帯を形成する。

Ⅲ群土器 縄文時代後期の土器

A類 牛ヶ沢式に比定される土器。(22-6)

1片出土した。波状口縁で波頂部から垂下した隆帯を貼り付け、その上から刺突を1つ施す。

B類 十腰内I式に比定される土器。(22-7～16)

口縁部下に平行沈線を用い、横位に半円状、渦巻文の文様が展開する。(22-7・8・9・10・11・12・13・14・15) 三角形の文様が展開するものもある。(22-16) 縄文と沈線を使って文様を形作るものがほとんどである。平口縁がほとんどで波状口縁(22-10)は1点のみである。色調は褐色から黄褐色で、胎土は細かい砂粒の混入が少量みられる。22-7は口縁部直下に弧状の文様を描く。22-10は沈線の間を埋めるように縄文が施文されている。施文順位は①縄文施文②沈線と思われる。22-13・11・12・14、22-15はいずれも胴部片である。22-16は波状口縁である。口縁下に浅い平行沈線を2条単位で施し、その下に鋸歯状の同じく浅い沈線を横位に施文する。沈線を埋めるようにLの縄文を多方向に施文した後、外面全体を磨く。

Ⅳ群土器 縄文時代中期後葉から後期にかけて土器群

A類 口縁部直下に幅広の無文帯を形成する土器。(22-17～22)

色調は赤褐色から淡黄褐色まで様々である。胎土は砂粒の混入が少なく、緻密である。口縁部付近まで縄文を施文した後、横方向にナデで無文部を形成する。口唇部の断面形状が三角形である。(22-17・18・19・20) 口縁が外傾するもの(22-17・18)、口縁がほぼ垂直に立ち上がるもの(22-19・20)などがある。口唇部が外側を向いているものもある。(22-21・22)

B類 口縁部が強く外傾する土器。(22-23～25、23-1～4)

色調は黒褐色・赤褐色・淡黄褐色を帯びていて、胎土は砂粒を多く含む。

第21図25は口唇部を丸く折り返している。その直下は横方向のナデにより、無文の部分もある。(22-19・20)は折り返し口縁で、口縁が折り返し部から外傾している。22-25は口唇部を丸く折り返している。その直下は横方向のナデにより、無文の部分もある。23-1・2は同じく口唇部が外側を向き、その直下まで口唇部付近まで縄文を施文している。23-1・2は同じく口唇部が外側を向き、その直下まで縄文が施文されている。23-3は口唇部直下が屈曲する器形で、口縁まで縄文が施文されている。23-4はほぼ垂直に立ち上がる器形である。口唇部が断面三角形形状である。全体的に磨耗が激しいため、詳細は不明である。

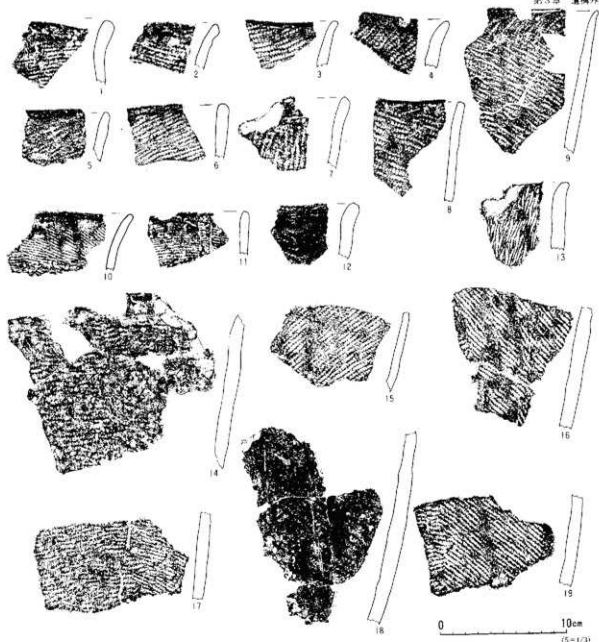
C類 折り返し口縁の土器。第3号住居跡出土遺物で1点出土した。(8-7)

D類 無文土器(23-12・18)

口縁部を横方向になでている。23-18は胴部片で縦位に磨いている。

E類 A・B類の他で、縄文のみを回転施文した土器(23-5～19)

1 口縁部 単節LRを横位に回転施文した土器(23-5・6)、縦位に回転施文した土器



番号	位置	層位	形状	器種	部位	粘土	地質	馬 部 測 定	内面装文	調査	整理
1	K-16	IV層	A-B	深鉢	口縁	織物	壁	上段部(口縁下子、白雲母の混入)	ミナキ		33
2	M-12	IV層	A-B	深鉢	口縁		壁	上段部(口縁下子)			38
3	K-17	IV層	A-B	深鉢	口縁		壁	上段部(口縁下子、白雲母混入)	ナギ		70
4	F-11	IV層	A-B	深鉢	口縁		壁	上段部(口縁下子)	ナギ		52
5	遺構北	IV-E	深鉢	口縁			壁	上段部(口縁下子(3))	ミナキ		25
6	K-9	IV層	A-E	深鉢	口縁		壁	上段部(口縁下子)	ナギ		25
7	L-15	IV層	A-E	深鉢	口縁	織物	壁	上段部(ナギ)	ナギ		28
8	K-9	IV層	A-E	深鉢	口縁		壁	赤土(織物?) 上段部(ナギ)			21
9	O-12	IV層	A-E	深鉢	口縁(割)		壁	上段部(口縁下子(3)) 上段部(口縁下子(4))			55
10	J-12	IV層	A-E	深鉢	口縁	石灰	壁	上段部(口縁下子)	ナギ(3)		66
11	J-12	IV層	A-E	深鉢	口縁	新砂	壁	上段部(口縁下子(3))、口縁部(口)	ミナキ、ナギ		19
12	J-12	IV層	A-E	深鉢	口縁		壁	上段部(ミナキ、口縁部ナギ)	ミナキ		17
13	L-15	IV層	A-E	深鉢	口縁		壁	上段部(口縁部混入)	ナギ		22
14	I-11	IV層	A-E	深鉢	胴		壁	上段部			13
15	I-15	IV層	A-E	深鉢	胴		壁	上段部(5ヶ所混入)	ナギ		204
16	M-15	IV層	A-E	深鉢	胴	石灰・砂灰	壁	上段部(厚約2cm)	ナギ		243
17	M-15	IV層	A-E	深鉢	胴	炭灰・砂灰	壁	上段部(炭灰混入)			216
18	A-10	IV層	A-E	深鉢	胴		壁	上段部(ナギ)			5
19	O-12	IV層	A-E	深鉢	胴	砂灰	壁	上段部			219

第23図 遺構外出土土器(4)

(23-9・8)、単節R Lを斜位に施文した土器(23-10・11) 無節Rを斜位に施文した土器(23-13)などがある。口縁付近まで縄文の施文がみられる。器形はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は平坦(23-8)、やや外側を向く(23-5)、断面三角形のもの(23-6)などの形状がある。23-10・11とも細かい縄文を用いて口縁部付近まで施文している。23-10は口縁部がやや外反する器形である。23-11は口縁から垂下して2条の浅い沈線が施文される。

2 胴部 胴部は単節L Rを縦位に施文する土器(23-14・17)、横位に施文する土器(23-15) 単節R L縄文を横位に施文する土器(23-16・19)である。23-16は施文単位が5条1単位で、その間隔を開けて施文している。23-19は縄文を縦方向に斜位に施文している部分も見られる。

F類 底部 (24-2~7)

24-2・3・4・5・6・7は底部とその付近の土器である。無文(24-2・5・6)、縄文施文(24-7)などがある。胎土は黄褐色砂粒を多量に含む。24-2は下から上方向に向かって、ケズられた痕跡がある。24-5は底部中央で底が盛り上がった器形をしている。24-6の底部の形は、面取りされたため、隅丸五角形を呈している。縦方向にナデの外側調整が行われているが、内面は不明である。24-7は底面付近まで縄文が施文されている。内面は黒褐色である。24-4は内面に多方向のナデがみられる。

G類 土器の一部と思われるもの (24-8・9)

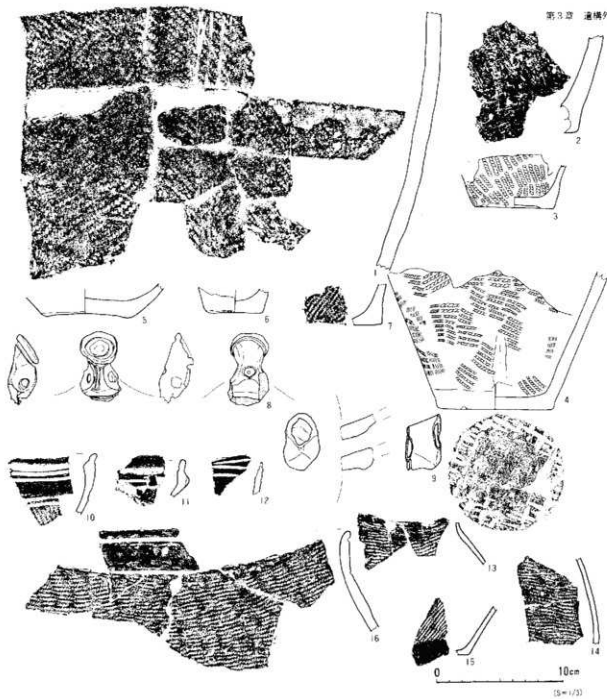
24-8は土器の上につく突起である。上部に円形文を持ちやや外側に迫り出すような格好をしている。円形文の下の部分は口縁に対して平行に穿孔している。24-9は注口の一部である。粘土紐を積上げて製作した痕跡がある。注口の下部がやや膨らんでいる。

第V群土器 弥生時代の土器

A類 砂沢式に比定される土器。(24-10~16)

24-10・11は浅鉢で、24-12も浅鉢の胴部片と思われる。24-13・14は同一個体と思われる。24-15は底部付近の破片である。細かい単節L R縄文が横位に施文される。24-16は広口壺と思われる。口縁部は無文で、平行な沈線2条が巡る。直下には細かい単節L R縄文が斜位に施文される。器形は無文帯の部分がほぼ直立して立ち上がり、胴部下半で強く屈曲すると思われる。

(坂本真弓)



番号	品名	形状	分類	用途	部位	胎土	装具	表面装飾	年号調整	備考	整理
1	L-12	瓦葺	B-D	深鉢	胴	整		1段横線、句原を内側を並大工彫文、羽状にする、縁部の挖線3条			9
2	J-8	瓦葺	B-F	深鉢	唇～底	新野・麻績	整	3段半周のケシ状模り	ナデ		161
3	K-16	瓦葺	B-F	深鉢	唇～底	整		1段横文→ナデ	ナデ		K10
4	K-10	瓦葺	B-F	深鉢	唇～底	整		1段横文、底外周へラナデ			S11
5	K-6	瓦葺	B-F	深鉢	底	整		底周中央部斜線付の、2本を1段印			179
6	F-16	瓦葺	B-F	深鉢	底	砂粒・石灰	整	特製ミナチ			153
7	K-15	瓦葺	B-F	深鉢	底	砂粒・石灰	整	1段横文			283
8	伊豆瓦	赤瓦	B-G	破鉢	口縁部	整		西宮文安記	ナ		225
9	Q-7	瓦葺	B-G	底口縁	破片、土裏	整		底口縁部分、粘土粒の練り上げ痕あり			227
10	N-8	瓦葺	V-A	浅鉢	口縁	整		1段と唇部に付、多数の刻線文	1本化粧		75
11	N-5	瓦葺	V-A	浅鉢	口縁	整		1段と唇部に付、多数の刻線文	1本化粧		76
12	O-8	瓦葺	V-A	浅鉢	胴	整		挖線2条、ナデ			64
13	Q-7	瓦葺	V-A	半形器	胴	整		横文線4本、1段斜線横文			85
14	Q-7	瓦葺	V-A	半形器	胴	整		横文線4本、1段斜線横文			83
15	Q-7	瓦葺	V-A	半形器	底	整		1段横文			84
16	F-7	瓦葺	V-A	口縁部	口縁	整		1段横文、半行挖線2条、胴部は1段横文に彫文、	ミナチ付		12

第24図 遺構外出土器(5)

第2節 石器(第25図～第28図)

石器類の総数は59点で、遺構外からの出土は50点である。これらは全て、中環状石層の上層からの出土で、縄文時代早期以降のものと考えられる。これらを素材・形態および使用痕跡から、石鎌・石匙・石筥・スクレイパー・剥片・磨製石斧・礫器・石錘・蔽石・磨石・台石・石皿・砥石・砕片に分けた。なお、報告書には、剥片及び砕片の16点を掲載しなかった。

以下に、器種別に石器の特徴を述べていく。

剥片石器

石鎌(25-1～3) 3点出土した。石質は1～2は珪質頁岩で、3は玉髄質珪質頁岩である。

いずれも有茎鎌に大別され、さらに基部の作出方法により細分される。

1は基部に挟りのある凹基有茎鎌である。2～3は基部が突出している凸基有茎鎌である。そのうち3は基部にアスファルトが付着している。

石匙(25-4) 1点出土した。石質は珪質頁岩である。

縦型の石匙である。4は背面のみの片面調整で、側縁に器体の中央まで及ぶウロコ状の剥離が施され刃部を作出する。腹面の側縁には、連続する微細剥離痕がみられる。

石筥欠損品(25-5) 1点出土した。石質は珪質頁岩である。

両面に周縁調整が施される。側縁は階段状になる粗い調整であり、背面には原礫面、腹面には主要剥離面の一部を残す。折れ面は被熱によりはじけ飛んだような痕跡を残す。形状や調整から、石筥の欠損品に分類した。

削器・搔器類(25-6～11) 総数6点が出土した。石質は全て珪質頁岩である。

刃部に使用痕跡を持つが、形態についての固有な名称が付されない、不定形石器とも呼ばれる類である。調整の違いにより細分される。このうち、Ⅰ類とⅢ類が本遺跡から出土している。

Ⅰ類 両面の周縁部に調整剥離が施されているもの(6～8)

Ⅱ類 側縁部に、極浅形剥離が施されているもの

Ⅲ類 側縁及び端部に、使用による刃こぼれ状の微細剥離が認められるもの(9～11)

(7)は、末端がヒンジフラクチャーになる縦長の素材を用いる。腹面の側縁に、粗い調整をいれて器面調整が施され、これによりバルブは除去される。刃部は側縁に連続する浅い剥離を施して作出される。(8)は小剥片の側縁に、両面から調整を施し刃部を作出する。(9～11)は3点とも素材の背面に原礫面を残し、原礫面を残す側面に微細剥離痕を持つ。器面調整は施されず、石核からの剥離作業で比較的初期の段階に生じた剥片を使用したものと思われる。

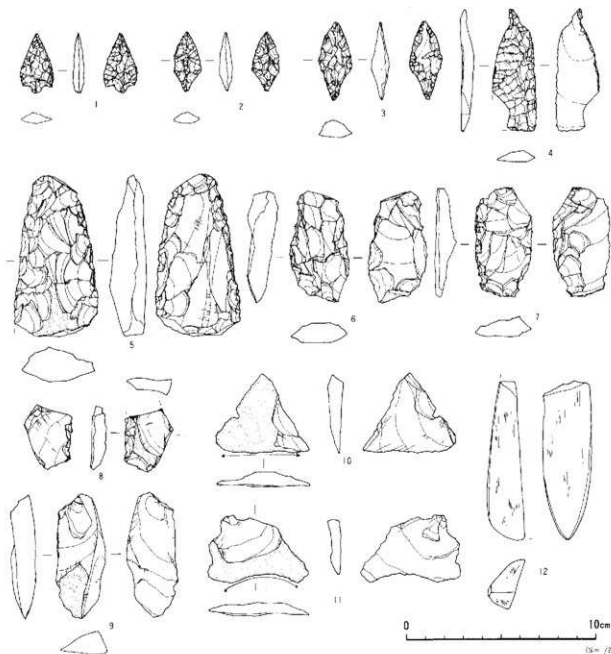
石斧類

磨製石斧(25-12) 1点の出土で、石質は凝灰岩である。

器体の長軸に沿って割れている欠損品で、割れ面は磨られて平坦になり、稜も丸味をおびていることから、欠損後も再度利用したものと思われる。割れ方や面の使用状況から、割れ面を意図的に作出した可能性もあると思われる。

礫石器

石錘欠損品(26-8) 1点の出土で、石質は安山岩である。



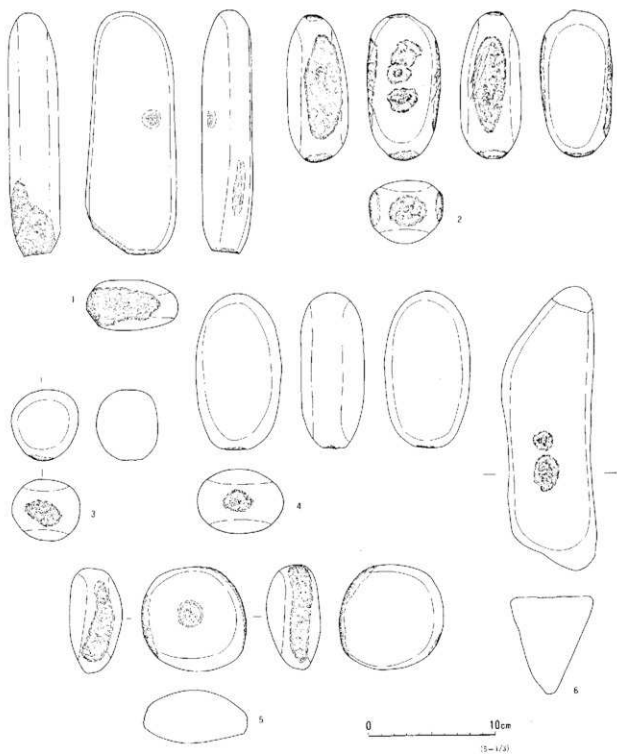
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	Q-17	IV	石鏃	32	18	6	2.5	珉質頁岩	
2	K-15	IV	石鏃	33	14	7	2.5	玉髓質珉質頁岩	
3	M-20	IV	石鏃	42	19	10	5.3	珉質頁岩	
4	P-41	VI	石鏃	65	23	7	7.4	珉質頁岩	
5	I-24	VII	石鏃	86	45	20	75.3	珉質頁岩	
6	K-15	IV	削器・核器Ⅰ	59	31	16	27.8	珉質頁岩	
7	L-15	Ⅲ	削器・核器Ⅰ	58	31	12	16.9	珉質頁岩	
8	M-17	VII	削器・核器Ⅲ	(33)	25	8	6.8	珉質頁岩	
9	L-14	IV	削器・核器Ⅲ	66	15	13	18.0	珉質頁岩	
10	O-12	IV	削器・核器Ⅲ	43	50	8	10.2	珉質頁岩	
11	M-13	Ⅲ	削器・核器Ⅲ	36	53	7	10.8	珉質頁岩	
12	M-22	IV	磨製石斧	(83)	(26)	20	56.5	凝灰岩	

第25図 遺構外出土石器(1)



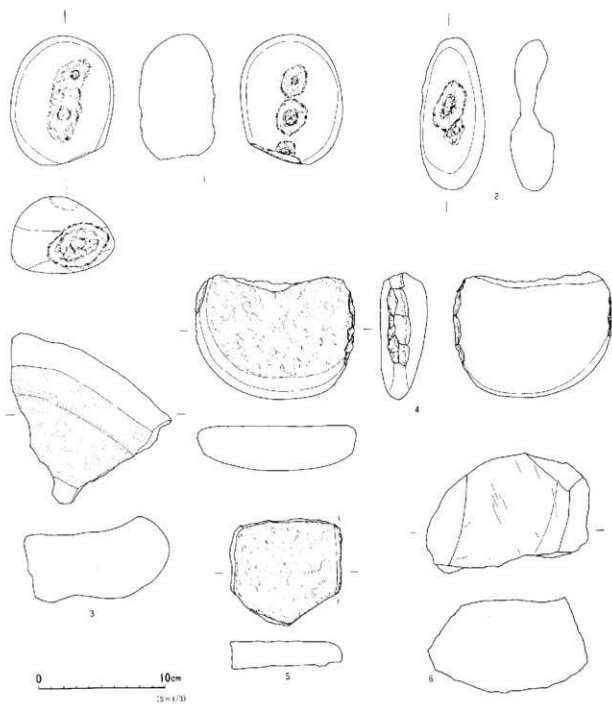
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
1	M-17	IV	磨石 I	112	54	31	249.8	安山岩	
2	J-19	不明	磨石 I	109	(55)	43	371.4	頁岩	
3	Q-9	III・IV	磨石 I	(73)	(45)	42	115.1	チャート	
4	K-16	III	磨石 I	660	(50)	34	198.6	安山岩	
5	N-16	IV	磨石 III	(80)	(54)	46	247.3	安山岩	
6	K-18	IV	磨石 III	138	62	50	543.7	安山岩	
7	J-13	III	磨石	142	78	45	752.8	チャート	
8	L-18	III・IV	石鉢	(71)	(57)	(3a)	79.7	安山岩	

第26図 遺構外出土石器(2)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	N-15	IV	磨石Ⅲ	193	73	40	921.3	安山岩	
2	L-18	Ⅲ・IV	磨石Ⅲ	127	58	48	380.2	安山岩	
3	M-17	IV	磨石Ⅰ	56	54	49	180.3	安山岩	
4	N-14	IV	磨石Ⅰ	123	68	50	648.8	レキ岩	
5	L-19	VI	磨石Ⅰ	225	72	77	1200.0	凝灰岩	
6	L-12	Ⅲ・IV	磨石Ⅰ	82	83	43	404.5	頁岩	

第27図 遺構外出土石器(3)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
1	N-15	IV	磨石皿	104	82	60	579.8	凝灰岩	
2	J-10	IV	磨石皿	120	(52)	43	250.2	安山岩	
3	O-14	IV	磨石・石皿	(133)	(127)	(77)	600.0	安山岩	
4	J-16	IV	磨石・石皿	(100)	(125)	37	423.3	安山岩	
5	I-19	Ⅲ	磨石・石皿	(84)	(89)	(22)	272.2	安山岩	
6	O-12	IV	磨石	(95)	(130)	(78)	1200.0	凝灰岩	

第28図 遺構外出土石器(4)

挟りは、片面からの打ち欠きにより、長軸上の端部に作出されている。

礫器（26-7）1点の出土で、石質はチャートである。

素材の端部を、片面から打ち欠いて刃部を作出している。

磨石（26-1～6、27-1、2）総数8点が出土した。石質は安山岩、頁岩、チャートで構成されており、なかでも安山岩が主体となっている。使用痕跡により、さらに3類に細分されるが、本遺跡より出土したのはこのうちⅠ類とⅢ類である。

Ⅰ類 自然礫の側縁及び稜に、磨面を持つもの（26-1～4）

Ⅱ類 自然礫の器面に磨り面を持つもの

Ⅲ類 自然礫の器面に磨面と敲打痕を持つ、複合機能のあるもの（26-5・6、27-1・2）

Ⅰは扁平な楕円形の素材を使用する。機能面の側縁に剥離を持ち、このバルブは磨面により切られている。磨面の形状はほぼ平坦で、機能面を持つ側縁も直線的になっている。完形品はこの1点だけである。4は両側縁に機能面を持っている。26-5はやや器厚のある楕円形と思われる礫を素材とし器面に敲打痕、側面に磨り痕を併せ持つ。26-6は三角柱状の素材を使用し、側面の稜に磨り痕、器面・端部に敲打痕を持つ。5、6ともに磨り面はほぼ平坦である。27-1は扁平な長楕円形の素材を使用する。端部の敲打痕に広がりが見られるが、側面の端部付近にもわずかながら磨り痕が見られる。27-2はやや器厚のある楕円形の素材を用い、器体の全面を使用している。

敲石（27-3～6、28-1・2）総数6点が出土した。石質は安山岩・凝灰岩・頁岩・レキ岩などで構成されている。使用痕跡により細分される。

Ⅰ類 自然礫の器面に敲打痕を持つもの（27-3～6）

Ⅱ類 自然礫の器面に敲打痕及び深い凹を持つもの（28-1・2）

27-3～5は、素材の一面にのみ機能痕跡を持ち、27-6は複数の面に機能部を持つものである。3・4は球形及び楕円形の素材を用い、その端部に浅い敲打痕を持つ。5は三角柱状の素材を用い、その平坦面のほぼ中央に限定される範囲で、浅い敲打痕を持つ。6は扁平で円形な素材の、中央及び両側縁に敲打痕を持つ。28-1は楕円形で器厚のある素材を用い、器面の両面及び端部に凹痕を持つ。本石器は器面の凹痕が切られていることなどから、一度欠損しており、端部凹痕はその欠損部を再利用した際のものと考えられる。

台石・石皿（28-3～5）3点の出土で、石質は全て安山岩である。完形品はなく4は両側縁に剥離を施している。

砥石（28-6）1点の出土で、欠損品である。石質は細粒凝灰岩で、よく仕上げ砥ぎや、中砥ぎの砥石に使用される石材である。砥面は平坦面ばかりでなく緩斜面もあり、また擦痕の方向が一定ではないことから、砥ぎの方向は多様であったと思われる。

（小山 浩平）

第4章 まとめ

本遺跡は、奥入瀬川南岸の丘陵地に立地し、調査区は丘陵頂部と南に面した斜面地である。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土坑18基と時期不明の掘立柱建物跡2棟、溝1条、現代の炭窯1基である。遺物は、縄文時代前期から弥生時代前期の土器と石器が総数約2,843点出土した。以下に、検出遺構と出土遺物について簡単にまとめる。

竪穴住居跡は、調査区北側の丘陵地頂部平坦地に4軒とその北に約30m程離れて1軒検出された。各住居跡の遺存状態は良いとはいえず、比較的残りの良い第1号および第2号竪穴住居跡は、長軸方向にやや窄まりながら張り出す不整楕円状の形態である。柱穴配置は五角形および六角形で、長軸方向につくられている柱穴が斜めに掘られていることが特徴である。炉跡は、第2号竪穴住居跡から地床炉が検出されただけである。この炉跡の焼土層は薄く、他の住居跡内にも明瞭に火を焚いた痕跡が見られない。また、各住居跡内堆積土からは自然埋没の状態は看取されない。このことから、住居跡は単期間での営みであり、廃棄時に壊されている可能性が考えられる。住居跡の機能時期は、床面出土遺物から縄文時代中期後葉の榎林式期と判断されるが、すべての住居跡が同時存在していたかは断言できない。

検出された土坑は、形態別に見るとフラスコ状土坑のほか溝状土坑、円筒形土坑がある。これらは、住居跡の周辺につくられているものと、斜面部につくられているものがある。斜面部につくられる数基の土坑については、他遺跡の検出例も含めて後述する。

調査区北側平坦地の土坑のうち、第2号、第5号と第6号土坑、第8号と第9号土坑はフラスコ状土坑である。第2号土坑を除き他はほぼ同規模で、住居群の東側につくられている。底面から遺物を出土しているものは、遺物から榎林式期に比定されるものと考えられ、同時期の遺物を出土する住居跡に付随して機能していたものと考えられる。なお、フラスコ状土坑の堆積土中からは最花式に比定される土器片も出土していることから、完全に埋没するまで時間幅があるものと考えている。

掘立柱建物跡は、2棟とも調査区北側の平坦地で検出された。建物跡は桁行の主軸方向がともにほぼ東西を向いており、間尺も近いことから同時期に機能していた可能性があるが、詳細な時期は不明である。溝跡の時期や機能についても不明である。

出土土器は、縄文時代前期の円筒下層式と中期上層式土器、弥生時代前期の土器が数点出土しているほか、後期に比定される土器もある。主体は縄文時代中期後葉の榎林式土器と最花式土器で、これらの遺構外出土のものには胴部破片が多い。出土位置は、グリッドライン14～17までの竪穴住居跡周辺からの出土が多い。石器では、蔽石や磨石などの礫石器の出土が多く、時期的には不明な点があるが、土器とほぼ同じ出土分布であり、竪穴住居跡の時期に伴うものと考えられ、住居周辺での積極的な活動が窺われる。

このように、検出遺構と出土遺物から縄文時代中期後葉頃には、本丘陵に小規模な集落が営まれていたことが判明した。また、集落形成以前や以降の各時期にも僅かな遺物の出土があり、何らかのかたちで生活に係っていたものと思われる。特に、縄文時代前期前葉以前は、斜面部に落とし穴と思われる円筒形土坑がつくられ、狩猟域であったものと考えられる。以下に、斜面部を中心につくられた土坑群について述べる。

円筒形土坑の配列について

本調査で斜面部に7基の円筒形土坑が検出された。この内、第12号・第14号・第5号・第1号土坑の底面から小穴が1個から3個検出されている。これらの土坑の小穴は、逆茂木の痕であると考えられることから、落とし穴と推定される。また、第7号・第4号・第10号土坑は平面形や規模や断面形態および堆積状況が類似することから、同じく落とし穴と判断される。いずれの検出面も中掇浮石層下面第Ⅷ層上面であることから、縄文時代前期前葉以前に構築されたものと考えられる。

これら7基の落とし穴と考えられる土坑はほぼ等間隔で作られている。県内で他に、落とし穴列として検出された例は少なく、八戸市の鶉窪遺跡に見られるだけである。以下に本遺跡の落とし穴とその配列について、鶉窪遺跡例との比較を中心に検討していきたい。

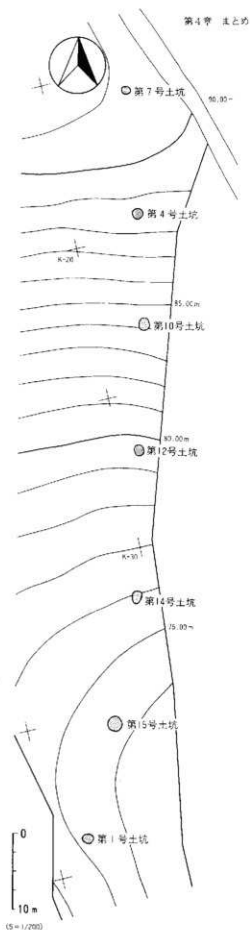
(形態) 平面形態はほぼ円形で、規模は開口部径が1.3mから1.7mである。検出面から底面までの深さは1mから1.2mである。7基とも断面形態は、底面から垂直に立ち上がり中位から上は播り鉢状になる。底面は、傾斜地にあっても、ほぼ平坦である。鶉窪遺跡の平面形態もほぼ円形であり、規模は大きく分けて3つに分類される。Aタイプは上端径が2.13mから2.53m、深さが1.16mから1.5mの大型の落とし穴で、Bタイプは上端径が1.68mから1.86m、深さが0.96mから1.26mの小型の落とし穴で、Cタイプは上端径が2.02mから2.08m、深さが1mから1.24mほどの中型の落とし穴である。15基とも断面形態は播り鉢状である。

鶉窪遺跡の分類に当てはめてみると、本遺跡の落とし穴はBタイプに分類される。鶉窪遺跡の例よりも小型落とし穴が多い。

(逆茂木痕) 落とし穴は底面に1個ないしは2個から3個の逆茂木痕をもつものがある。逆茂木痕の深さは20cmから30cmである。丘陵頂部や斜面上部に構築された落とし穴には逆茂木が見られず、斜面下部に構築されたものほど逆茂木が多く見られるようである。

鶉窪遺跡の逆茂木痕は8基の落とし穴から検出され、底面に1個から4個の逆茂木痕を持ち、深さは20cmから50cmである。逆茂木痕は埋没沢南東の斜面上部に集中するが明確ではない。

(堆積状況) いずれも自然堆積で、堆積土は全体的に黒色土から黒褐色であり、黄褐色浮石を混入しているものが多い。鶉



第29図 落とし穴配置

窪遺跡の例についても自然堆積で、堆積土の最上部に中振浮石がレンズ状に堆積している。

(時期) 構築年代は、出土遺物が全く見られず、時期決定の根拠に欠ける。検出状況等から中振浮石降下年代(約5,500年前)よりも前の縄文時代前期前葉以前に構築されたと考えられる。窪遺跡についても同様に中振浮石降下年代以前の時期を当てている。

(配列) 本調査区内を約16mから18mのほぼ等間隔で南北に並んでいる。斜面地の傾斜地に対して直行するような配列である。標高90mの調査区北側の丘陵頂部から、標高75mの南側緩斜面にかけての斜面地を落とし穴が縦断する格好となる。総数では7基の落とし穴を検出したが、第1号土坑の南側の圍場整備された部分にも列として伸びていた可能性もあるほか、東側調査区域外に落とし穴が構築されていた可能性もある。

窪遺跡の落とし穴は埋没沢を囲み、標高45mから53m内に地形の等高線に沿って平行に構築されている。埋没沢を挟んで東側は、3mから15mの範囲で弧状の列を成している。規模別に分類した落とし穴の分布は、A・Cタイプが斜面の上部に、Bタイプが埋没沢付近にまとまる傾向にあるが、明確ではない。

県外の例では岩手県北の軽米町水吉VI遺跡に見られる。水吉VI遺跡では21基の落とし穴が、標高約105mと102mの2本の等高線に概ね沿う形で弧状に配列されている。窪遺跡例と同様に、列が地形の等高線に沿って平行に配列されている。軽米町の大塚II遺跡の落とし穴15基は、標高205mの丘陵平坦地上に弧状の列をなす。

(まとめ) 本遺跡と他遺跡の落とし穴列の相違点をまとめる。

第一に、地形に対する落とし穴配列に違いがある。窪遺跡や水吉VI遺跡の落とし穴のように地形の等高線に平行する落とし穴列とちがい、本遺跡の落とし穴列は地形の等高線に直行する。

第二に列の形状である。窪遺跡・水吉VI遺跡・大塚II遺跡では弧状の列形状であるのと違い、直線的な列形状である。円筒形落とし穴の配列については、石岡憲雄氏によると、主に直線状よりも弧状の傾向を示すという指摘がなされている(石岡憲雄1991)。

本遺跡の落とし穴列と他遺跡との配列の相違は、狩猟の対象としていた動物の大きさや習性の違いによるものと考えられるが、断定はできない。また、周辺の地形も密接に関わってくると考えられる。

本遺跡及びその周辺は、奥入瀬川を望む段丘上に立地し、幾つかの沢筋が見られる。この段丘上に第4編平窪(2)遺跡が位置する。ここでも2基の円筒形土坑が検出されており、底面に逆茂木痕を持つことから、落とし穴として機能していたと考えられる。構築時期も、検出状況からはほぼ同時期と推定される。この段丘は縄文時代前期前葉以前に狩猟域としてかなり頻りに利用され、段丘の幾筋もの沢に向かって落とし穴が作られたと推定される。

(坂本真弓)

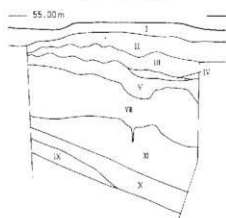
第3編 平窪(1)遺跡



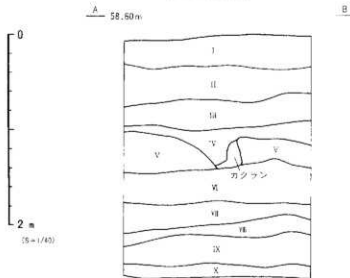
調査区北完掘(西から)



平窪(1)遺跡層序



平窪(2)遺跡層序



第1図 遺構配置・平窪(1),(2)基本土層

第1章 基本土層

発掘調査区の現況は工場跡地及び荒地である。跡地は、削土により平坦で基礎部分の掘り返しの跡が広範囲におよんでおり、その範囲の遺構は消滅している。本遺跡の層序は、調査区東側境界面を掘り下げ確認した。本遺跡と近接してある平窪(2)遺跡の自然堆積層と同じ状態にあることから、以下にあわせて記述する。なお、平窪(1)遺跡では、中振浮石層以下の層に欠層するものがある。

第I層 10YR 2/1 黒色土：表土層である。層厚は10cm～30cmである。平窪(1)遺跡では攪乱が顕著でそれについては、I b層およびI c層と表記する。

第II層 10YR 2/3 黒褐色土：層厚は10cm～40cmである。灰白色岩粒を含み、やや粘性がある。平安時代以降の遺構の掘り込み面である。平窪(1)遺跡では部分的に欠層している。

第III層 10YR 2/2 黒褐色土：層厚は10cm～40cmである。縄文時代の遺構面である。

第IV層 10YR 3/4 暗褐色土：層厚は10cm程で、平窪(1)遺跡の調査A区では部分的に欠層している。

第V層 10YR 7/8 黄橙色砂質土：中振浮石層で厚さは10cm～40cmである。平窪(2)遺跡に厚い。

第VI層 10YR 2/2 黒褐色土：層厚は30cm～40cmで、平窪(1)遺跡では欠層している。

第VII層 10YR 2/3 黒褐色土：層厚は10cm～40cmで、平窪(1)遺跡では沢地付近の斜面部にみられる。

第VIII層 10YR 3/3 暗褐色土：第VII層と第IX層の漸移層

第IX層 2.5Y 5/6 黄褐色粘質土：八戸火山灰最上層に相当。堅くしまりをもつ。

第X層 10YR 6/3～6/8 砂礫層：本層中での細分も可能。平窪(2)遺跡では上位まで確認。

第XI層 10YR 6/1～6/3 褐灰色～灰黄褐色土：八戸浮石流凝灰岩に相当。

第2章 検出遺構と遺物

概要

本遺跡は、奥入瀬川と十和田市南端部を流れる後藤川に挟まれた丘陵地に立地する。遺跡のある丘陵の南北には深い沢があり、馬背状の丘陵地形を形成している。標高は60m～50m程で、遺跡を横断して国道4号線が通っている。このため、国道の東側をA区、西側をB区と分けて調査した。調査区A区は、コンクリート工場の跡地で広範囲に削平攪乱されていた。削平は、第VIII層の八戸火山灰層まで及んでいる。調査B区は小面積であるが、国産の立木の伐採が遅れたため、調査が限定された。

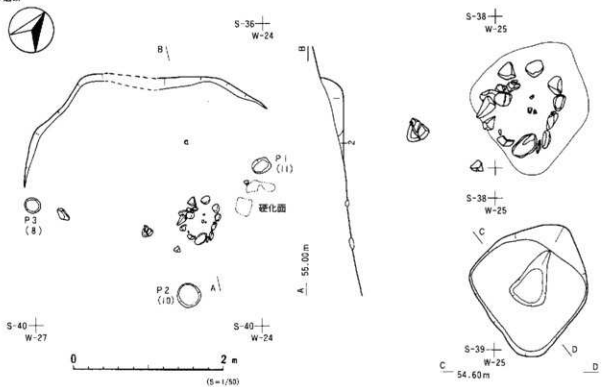
調査により、竪穴住居跡1軒、溝状土坑14基、土坑7基、焼土炭化物範囲1基、炭窯1基を検出した。遺構に位置から削平範囲にも遺構が存在していた可能性は高い。遺構の時期は、縄文時代と平安時代比定されるものである。炭窯については、近現代の所産のものであるがあわせて報告する。

第1節 竪穴住居跡 (第2図)

本調査で検出された住居跡は1軒である。

第1号竪穴住居跡 (第2図)

[位置と確認] 調査A区南側緩斜面、Q・R-5・6グリッドに位置する。表土撤去後に第V層ローム面、黒色土と褐色土の混合した不整なプランで確認した。本遺構の西側は、国道建設の際に大きく攪拌されており、検出時には攪乱の可能性があったが、半裁後に住居跡と確認した。

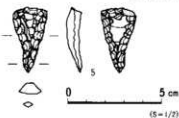
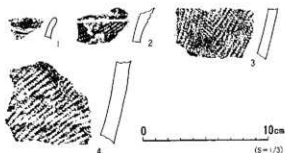


第1号竪穴住居跡 堆積土

第1層 10YR4/6 褐色土
第2層 10YR3/4 黄褐色土

第1号竪穴住居跡 炉堆積土

第1層 10YR2/3 褐色土(強磁化物混)
第2層 10YR3/1 黄褐色土
(黒色土と黄褐色土の混合層)



番号	位置	層位	器種	器底	胎土	形状	外面調整	内面調整	番号	参考
1	1位	底	深鉢	口縁	砂粒	整線	単面L-1口縁ナデ			P20
2	1位	底	深鉢	底	砂粒	整線	L,R横位 平行沈線2条			13
3	1位	底	深鉢	底	砂粒	整線	単面L,R横位	ヘラナデ		1
4	1位	底	深鉢	底	砂粒	整線	単面L,R横位	ナデ		14
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考	
5	1位	礫土	心礎	35	29	8	3.7	珪質灰岩	S-5	

第2図 第1号竪穴住居跡・出土遺物

[平面形・規模] 斜面地にあり、遺構の南側の壁を捉えることができなかったため、全体形状は不明である。遺存している部分から、およそ4m程の円形の住居であったものと思われる。

[堆積土] 褐色土を主体とした土が2層確認された。

[壁・床] 床面は多少起伏があるものの、斜面とは異なりほぼ平坦である。また、小範囲ではあるが、炉の北側に堅く締まった部分を検出した。壁は北側部分に、不整な弧状に僅かに遺存している。高さは検出面から、最大30cm程である。

[炉] 石囲い炉である。自然礫を16個、ほぼ円形に配置して作られてある。用いられている礫には、特に規則性はみられず、隙間には礫片や小円礫を充填している。炉内部には、明瞭な焼土面を確認できなかったほか、礫自体も明瞭に被熱してはいなかった。

[柱穴] 住居内から3個の小穴を検出した。深さは10cm~20cmである。これ以外に検出できなかった。

たが、本住居の柱穴ないしはそれに関係するものと考えている。

[出土遺物] 炉の内側と周辺から、石器と土器が数点出土した。

[小結] 本遺構は、遺存状態が悪く詳細は不明であるが、出土土器と石囲炉であることから、縄文時代中期から後期頃の住居跡と考えている。

第2節 土 坑

本調査では、近現代の炭窯1基を含む総数22基の土坑が検出された。調査B区で検出された円形の土坑は、ほぼ同一規模で等間隔な配置で作られており、土質から縄文時代に比定されるものと考えられる。溝状土坑については、調査区境界のものが半数あるほか、削平部分にも存在していた可能性がある。特に規則的な配列はみられない。各遺構の掘り込みは、第Ⅱ層面及び第Ⅲ層面である。これらのほか、土質から平安時代に比定されるものもある。これらについて、形態および所属時期別に図示し記述するため、記載の土坑番号は昇順どおりではない。[重複] や [出土遺物] が無いものについては項目を削除する。

第1号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査A区東側境界I-22グリッドに位置する。粗掘り前のトレンチ掘りの際検出した。

[平面形・規模] 調査区外に延びているため全体形は不明である。検出した部分で、開口部長軸は約1.5m、底面長軸は約1.2mある。開口部幅は約1.5mである。深さは掘り込み面から最大1.3mあり、断面形は中位から開くY字型である。[堆積土] 自然堆積で11層に分けられる。第4層以下は崩落による堆積で、各層に中振浮石を含む。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁のうち第Ⅲ層とⅣ層を壁としている部分は大きく崩落している。

第2号土坑 (第3図)

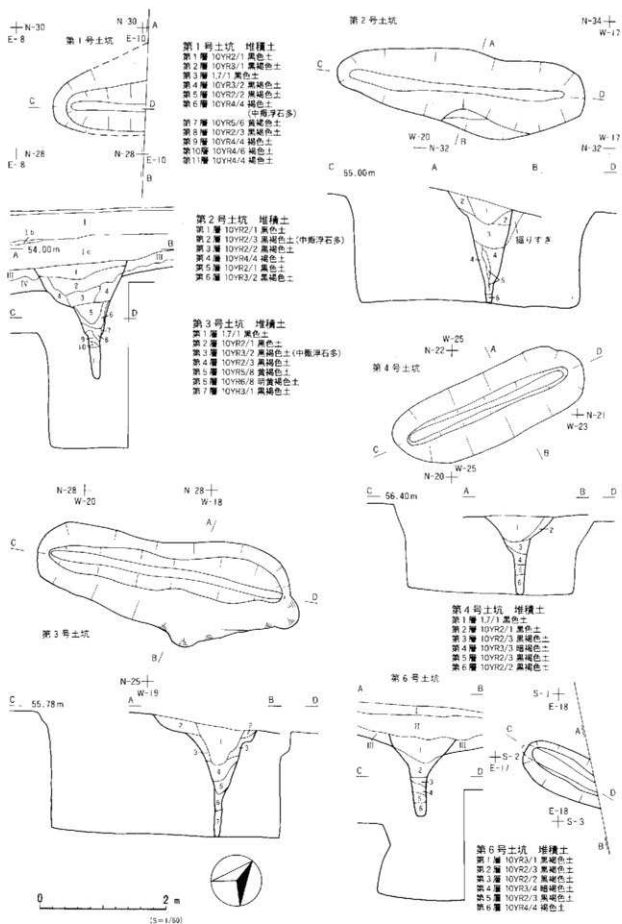
[位置と確認] 調査A区の北側沢に面した緩斜面部P・Q-23グリッドに位置する。第Ⅲ層面で黒色の長楕円形プランで検出した。[平面形・規模] 東側がやや膨らむ葉巻形である。開口部長軸は約4m、底面長軸は3.4mある。開口部幅は約1.3mである。深さは検出面から最大1.7mあり、断面形はV字型である。[堆積土] 8層に分けられる。第4層は上部の周壁が崩落したものと考えられる。[底面・壁] 底面は平坦である。

第3号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査A区の北側緩斜面部P・Q-21グリッドに位置する。斜面下方4m離れて第2号土坑がある。開口部の東側に攪乱を受けている。[平面形・規模] 不整な葉巻形である。開口部長軸は4.1m、底面長軸は約3.8mある。開口部幅は約1.3mである。深さは検出面から最大1.9mあり、断面形はV字型である。[堆積土] 7層に分けられる。第4層以下の各層は、周壁の崩落土と流入土の混合層と考える。[底面・壁] 底面は平坦である。

第4号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査A区の北側Q・R-20グリッドに位置する。[平面形・規模] 不整な長楕円形である。開口部長軸は3.2m、底面長軸は約2.6mある。開口部幅は約1.2mである。深さは検出面から最大1.4mあり、断面形はY字型である。[堆積土] 6層に分けられる。第3層以下の各層は、周壁の



第3圖 土坑(1)

崩落土と流入土の混合層と考える。第1層と第2層は、崩落等で埋没し土圧で窪んだ部分に自然堆積した黒色土と考えられる。[底面・壁] 底面は平坦である。

第5号土坑 (第4図)

[位置と確認] 調査A区の北側O-19・20グリッドに位置する。[平面形・規模] ほぼ葉巻形である。開口部長軸は約4.2m、底面長軸は3.6mある。開口部幅は約1.2mである。深さは検出面から最大1.9mあり、断面形はV字型に近い。[堆積土] 9層に分けられる。第7層は上部の周壁が崩落したもので、間に第6層が流入している。堆積状況から、下層の堆積から崩落までにはやや時間があったものと思われる。[底面・壁] 底面は平坦である。底面の南側は壁側にやや入り込んでいる。

第6号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査A区東側境界G-14グリッドに位置する。[平面形・規模] 調査区外に延びているため全体形は不明である。検出した部分で、開口部長軸は約1.3m、底面長軸は約1.1mある。開口部幅は約1.1mである。深さは掘り込み面から最大1.3mあり、断面形は中位から開くY字型である。[堆積土] 6層に分けられる。第3層以下の各層は、周壁の崩落土と流入土の混合層と考える。[底面・壁] 底面は平坦である。底面の端部は、緩く湾曲して内側に入り込んでいる。

第7号土坑 (第4図)

[位置と確認] 調査A区南東側G-11・12グリッドに位置する。[平面形・規模] 不整な葉巻形である。開口部長軸は約3.3m、底面長軸は2.7mある。開口部幅は最大1.4mで、西側に広いが崩落によるものと思われる。深さは検出面から最大1.8mあり、断面形はV字型に近い。[堆積土] 6層に分けられる。第5層は崩落土で、間に流入土の混合した第4層が入り込む。[底面・壁] 底面は平坦である。

第8号土坑 (第4図)

[位置と確認] 調査A区のほぼ中央部O-16グリッドに位置する。[平面形・規模] 不整な長楕円形に近い。開口部長軸は約3.2m、底面長軸は約3.4mある。開口部幅は最大1.2mである。深さは検出面から最大1.5mあり、断面形はV字型に近い。[堆積土] 10層に分けられる。第6層は上部の周壁が崩落したもので、間に第5層が流入している。堆積状態から、下層の堆積から崩落までにはやや時間があったものと思われる。[底面・壁] 底面は平坦で、緩やかに湾曲している。底面の両端部は、内側に入り込んでおり開口部と底面がややずれている感じがある。地震の影響によるものと考えている。

第11号土坑 (第4図)

[位置と確認] 調査A区の南側K・L-10グリッドに位置する。[平面形・規模] 不整な長楕円形である。開口部長軸は3.5m、底面長軸は約2.9mある。開口部幅は約1.4mあるが、崩れている可能性が高い。深さは検出面から約1.8mあり、断面形はY字型に近い。[堆積土] 11層に分けられる。崩落土を主体にし流入土の混合層しているものと考えられる。[底面・壁] 底面は平坦でほぼ直線である。

第13号土坑 (第5図)

[位置と確認] 調査A区南東部境界G-11グリッドに位置する。黒色土の不整な落ち込みで検出した。[重複] 掘り下げ時には風倒木の可能性があったが、境界壁面の土層から重複した遺構であると判断された。本遺構の方が新しい。[平面形・規模] 調査区外に延びているため全体形は不明である。検出した部分で、開口部長軸は約1m、底面長軸は約90cmある。開口部幅は約1.1mである。深さは掘り込み面から約1.7mあり、断面形はV字型である。[堆積土] 8層に分けられる。第5・6層は上部の

周壁が崩落したもので、間に第4層が流入している。堆積状態から、下層の堆積から崩落までにはやや時間があったものと思われる。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁のうち第Ⅲ層とⅣ層を壁としている部分は大きく崩落している。

第14号土坑 (第5図)

[位置と確認] 調査A区南東部境界G-11グリッドに位置する。[重複] 第13号土坑と重複し、本遺構の方が古い。[平面形・規模] 調査区外に延びているため全体形は不明である。検出した部分で、開口部長軸は約1.5m、底面長軸は1.7mある。開口部幅は約1mである。深さは掘り込み面から約1.9mあり、断面形は不整形である。[堆積土] 14層に分けられる。第2層から第11層までの層は、地山の細ブロックが多量に混入する。人為的に壊して埋めている可能性がある。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁のうち第Ⅲ層とⅣ層を壁としている部分は大きく崩落している。

第15号土坑 (第5図)

[位置と確認] 調査B区のB'-15グリッドに位置する。国道の法面部分にあたり、障害物のため完掘できなかったが、おそらく東側は削平されているものと思われる。[平面形・規模] 検出した部分で、開口部長軸は約1.7m、底面長軸は約1.65mある。開口部幅は90cmである。深さは掘り込み面から約2mあり、断面形はV字型である。[堆積土] 11層に分けられる。第3層以下の各層は、周壁の崩落土と流入土の混合層と考える。[底面・壁] 底面は平坦である。

第20号土坑 (第5図)

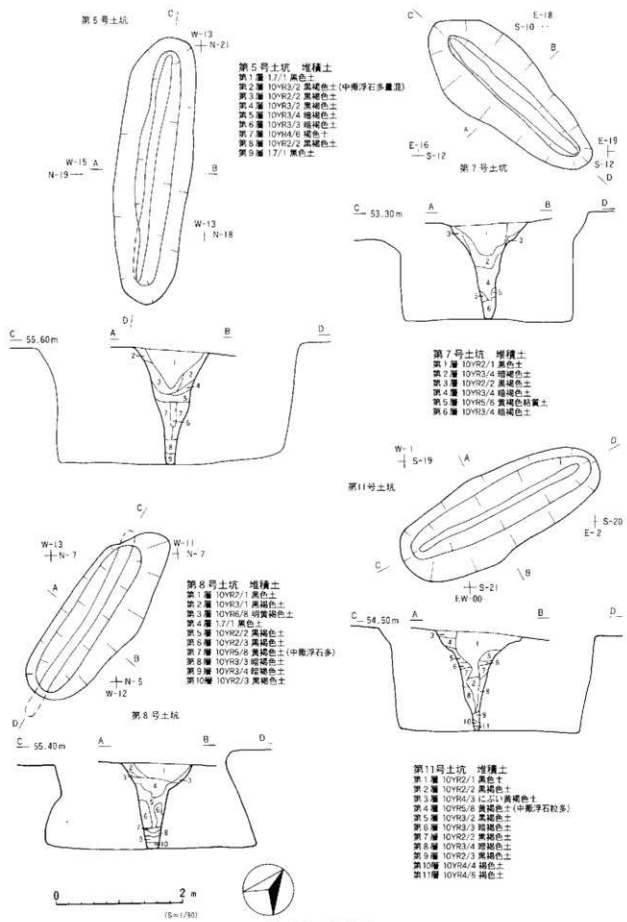
[位置と確認] 調査B区のA'-11グリッドに位置する。本遺構の大部分は、第15号土坑と同じく削平されているものと思われる。近接して第21号土坑がある。開口部部分は重複していた可能性がある。[平面形・規模] 検出した部分で、開口部長軸は90cm、底面長軸は60cmである。開口部幅は約1.2mである。深さは掘り込み面から約1.9mあり、断面形は不整なY字型である。[堆積土] 8層に分けられる。[底面・壁] 底面は平坦である。

第21号土坑 (第5図)

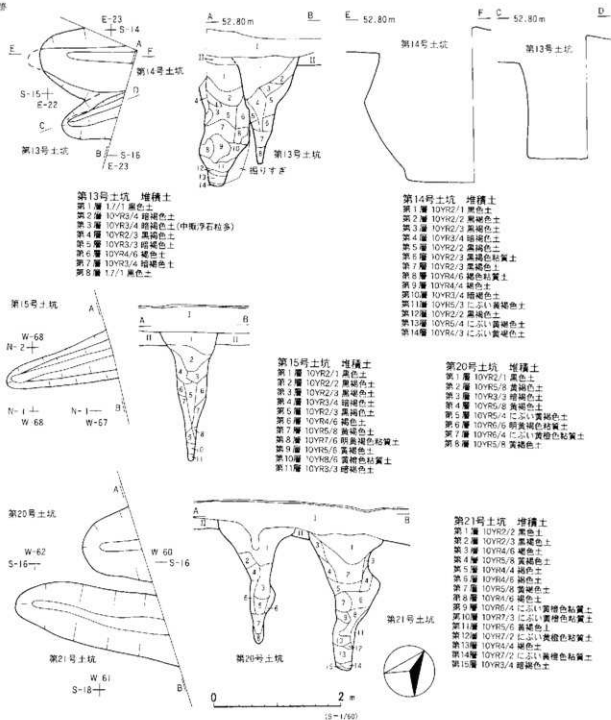
[位置と確認] 調査B区のA'-11グリッドに位置する。近接して第20号土坑があり、開口部部分は重複していた可能性があるが、新旧は不明である。[平面形・規模] 検出した部分で、開口部長軸は2.4m、底面長軸は2.1mである。開口部幅は約1mである。深さは掘り込み面から約2.1mあり、断面形は不整なY字型である。[堆積土] 15層に分けられる。地山のブロックが混入する土で人為的に埋められている可能性がある。[底面・壁] 底面は平坦である。

第16号土坑 (第6図)

[位置と確認] 調査B区のC'-14グリッドに位置する。第Ⅳ層面で黒褐色土の不整形形で検出した。近接して第17号～第19号・第22号土坑がある。[平面形・規模] 平面形は2.4m×2.1mのやや楕円形に近い形状である。底面のやや南寄りに径が約80cm程の小穴をもつ。検出面から小穴底面までの深さは、1.3mある。この小穴については堆積状況から本遺構に付随するものと判断している。断面形状は、小穴を含め段状となるが、北側部分ではさらに一段付く階段状となる。堆積土の状態から、他の遺構との重複ではないものと判断している。[堆積土] 9層に分けられる。褐色土を主体にした土で、第4層や中振浮石粒が多量に混入する第7層は周壁の崩落と判断しているほか、他層の堆積状況から自然堆積と判断している。[底面・壁] ほぼ平坦で前述の小穴がある。周壁もほぼ直に立ち上がる。



第4图 土坑(2)



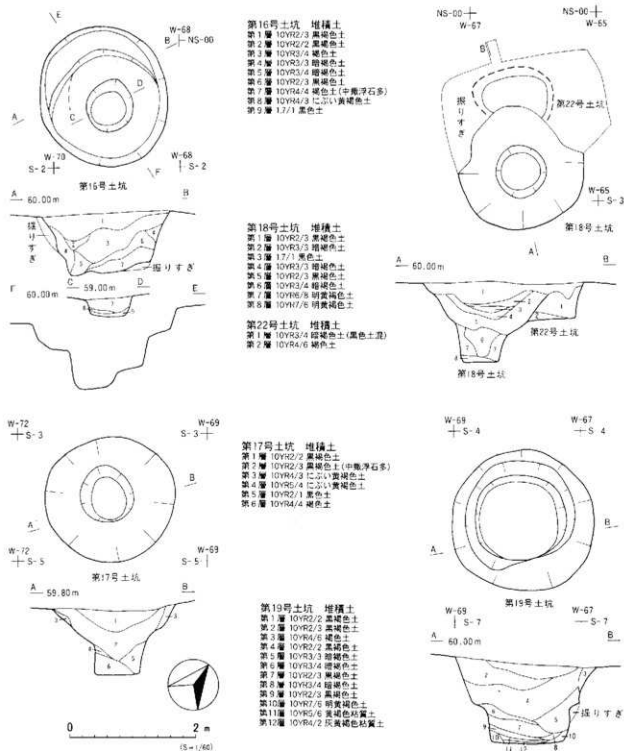
第5図 土坑(3)

第17号土坑 (第6図)

[位置と確認] 調査B区のC⁻13・14グリッドに位置する。第IV層面で黒褐色土の円形で検出した。
 [平面形・規模] 径が最大2.1mの円形である。検出面からの深さは1.1mである。[堆積土] 6層に分けられる。第3層と第4層は土質から壁が崩落ないしズレたものと考えている。堆積状況から自然堆積と判断している。[底面・壁] 底面は平坦で、周壁は底面から直に立ち上がり、中位で大きく外側に開く。断面形状はY字型である。

第18号土坑 (第6図)

[位置と確認] 調査B区のB⁻14グリッドに位置する。第IV層面で黒褐色土の不整形で検出した。



第6図 土坑(4)

[重複] 土層面観察により、他の遺構と重複しているものと判断した。本遺構の方が新しく、重複しているものを第22号土坑として調査した。[平面形・規模] 重複していることの確認が遅れたことと、土質の誤認から開口部部分を大きく掘り過ぎてしまった。遺存している部分から径が約2m程の円形であったものと思われる。深さは検出面から1.3mある。[堆積土] 8層に分けられる。第7層は周壁の崩落土で、堆積状況から自然堆積と判断している。[底面・壁] 底面は平坦である。周壁は第17号

土坑と同じく、底面から直に立ち上がり、中位で大きく外側に開く。断面形状はY字型である。

第19号土坑 (第6図)

〔位置と確認〕 調査B区のB' C' -13グリッドに位置する。第IV層面で黒褐色土の円形で検出した。

〔平面形・規模〕 平面形は2.3m×2.2mのほぼ円形である。深さは検出面から最大1.4mある。

〔堆積土〕 12層に分けられる。黒色土が主体の自然堆積と考える。第10層は土質から崩落土と判断している。また、第11層と12層には黒色土と黄褐色粘土、灰黄褐色粘土に砂粒が多量に混入し互層に堆積している。埋没初期段階は流水による堆積であったものと考えられる。

〔底面・壁〕 底面は平坦である。南側の壁は底面から開きながら立ち上がり、ほかの周壁は中位で段を持つ形状である。

第22号土坑 (第6図)

〔位置と確認〕 調査B区のB' -14グリッドに位置する。〔重複〕 第18号土坑と重複している。本遺構の方が古いと判断した。〔平面形・規模〕 土を誤認したため、大きく掘りすぎてしまい形状を判断できない。遺存している底面は不整な楕円形である。〔堆積土〕 2層に分けられる。褐色土で黒色土粒を混入する。〔底面・壁〕 底面は平坦である。周壁は掘りすぎてしまい不明である。

第9号土坑 (第7図)

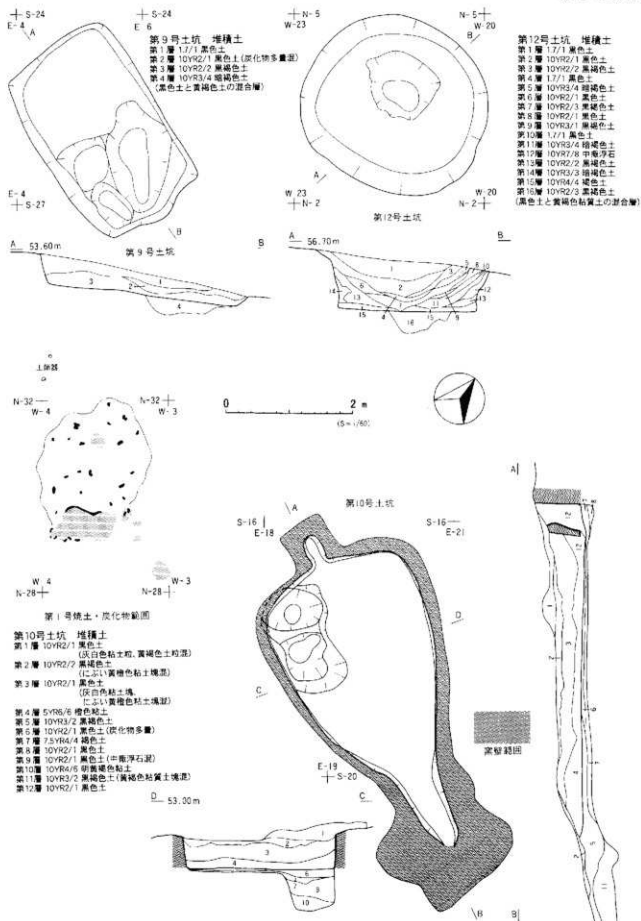
〔位置と確認〕 調査A区南側緩斜面J-8グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 規模は開口部長軸で約3.3m、単軸で2m、底面長軸で3m、単軸で約1.8mある。形状はほぼ隅丸長方形である。深さは検出面から最大50cmである。〔堆積土〕 4層に分けられる。黒色土を主体にし、第2層には炭化物が混入する。第4層は、黒色土と黄褐色土の混合土で、遺構の南半部に見られる。〔底面・壁〕 底面は、遺構の北半部は平坦であるが南半部は不整で起伏がある。全体的には、傾斜に沿ってやや傾斜している。南半部の一段深く起伏のある部分については、伴うものと考えられるが、掘形であるかどうか断言できない。周壁は底面からほぼ直に立ち上がる。

第12号土坑 (第7図)

〔位置と確認〕 調査A区中央部Q-15グリッドに位置する。第IV層面に黒色土の円形で検出した。周辺に同様な遺構は見られない。〔平面形・規模〕 3m×2.7mのやや楕円形に近い形状である。底面には、中央から北側にかけて不整な小土坑状の掘り込みがある。検出面から底面までの深さは約90cmで、底面から掘り込まれているものまでは最大1.3mある。〔堆積土〕 16層に分けられる。黒色土が主体で、堆積状況から自然堆積と判断している。本遺構の東側、第7層の上面にブロック状に火山灰の堆積がみられた。小規模で他にみられないことから、風流水による二次堆積によるものと考えている。〔底面・壁〕 底面は平坦である。底面にある小土坑状のものは起伏がある。伴うものと考えられるが、掘形であるかどうか断言できない。周壁は底面からほぼ直に立ち上がる。

第10号土坑 (第7図)

〔位置と確認〕 調査A区南東部境界付近のC・G-9・10グリッドに位置する。表土直下に、黒色土に焼けた土のブロックが多量に混入した、大きな不整形プランで検出した。〔平面形・規模〕 全体的な平面形は紡錘形である。焚口から煙出孔まで含めた長さで5.4mあり、焼成室の最大幅は2.5mである。掘形を含めると長さで25cm、幅で50cm程大きくなる。検出面から焼成室底面までの深さは50cmである。焼成室西側に小土坑状の掘り込みがある。形状は不整形で、規模は1m×1.7m、焼成室底面からの



第7図 土坑(5)

深さは65cmある。堆積土から本遺構に付随する施設と判断される。[堆積土] 底面の小土坑および作業場部分を含め12層に分けられる。第4層は橙色粘土で天井壁の崩落したものと考えている。小土坑内の堆積土は、黒色土に地山粘質土が細ブロックで混入するもので、第6層と7層は掘形埋土から連続している。第6層は還元面、第7層は酸化面である。焚口と作業場部分の第5層と第11層中には、炭の細片が多量に混入している。[底面・壁] 底面は平坦で全面が還元している。壁は、掘形に約25cmの厚さで粘土を張り付け構築している。焼けて橙色である。とことどころに板目の痕跡がみられる。

[煙出孔] 規模は30cm×40cmの楕円形で、焼成室奥壁のほぼ中央に周壁と同じ粘土を張り付け作られている。粘土は薄い鉄板により固定されていた。[小結] 粘土で構築されたドーム型の炭窯と判断される。煙出孔部分の鉄板の使用と、さほど腐食が進んでいない状況から、本遺構については近現代の所産であるものと考えている。

第3節 焼土・炭化物 (第7図)

第Ⅱ層掘り下げ時に、調査A区北側斜面部近くM-23グリッドに焼土と炭化物の範囲を検出した。2.4m×1.7mの不整な楕円形範囲に細かい炭化物と焼土がみられた。範囲中には、焼土粒と炭化物が黒色土と混合した状態にあった。本遺構の北側に1m程離れて土師器坏の細片が2点出土した。土層及び出土土師器から、本遺構は平安時代に比定されるものと考えているが、詳細は不明である。

第3章 遺構外出土遺物

第1節 土師器・縄文土器・石器

本調査で出土した遺物には、土師器が2点、縄文土器が80点程である。土師器は、焼土・炭化物範囲に近接して2点出土した。成形痕から平安時代に比定されるものである。小破片で図示できない。縄文土器の多くは、調査B区から出土している。層位は第Ⅱ層と第Ⅲ層である。細片が多く図示できるものは少ない。石器は1点だけの出土であり合わせて記述する。

縄文土器 (第8図1~16)

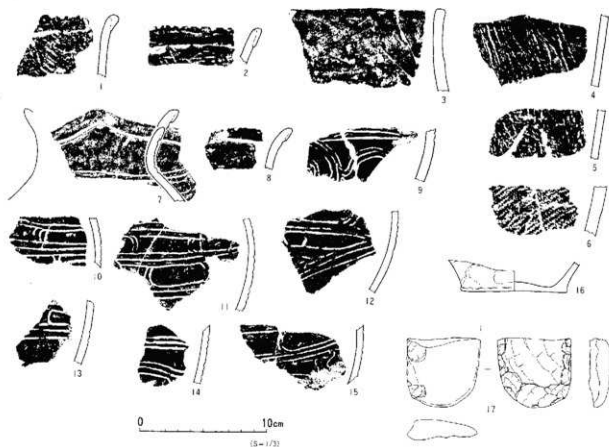
第8図1と2は折り返し口縁となるものである。口端部に工具による刻みが施されている。1の器面は荒れていて明瞭ではないが、捺糸が施文されている。2の器面には工具の痕が残る。共に胎土には石英を含んでいる。3は幅の広い無文の口縁部である。工具によるナデの痕がみられる。4と5は粗い捺糸が施文される胴部片である。6はR Lの単節斜状文が施される。胎土には砂粒を含む。7~15は同一個体である。出土点数は多いが復元までには至らない。口唇折り返しで小波状口縁になる壺型土器の可能性ある。口唇直下と頸部に2条の沈線を施し、口縁無文帯となる。胴部には3条を一単位とした横位の沈線を施し、その中に沈線による楕円形文を施している。

7~15は十腰内I式に比定されるもので、他の土器もほぼ同じ時期に比定されるものと思われる。

石器 (第8図17)

遺構外からの出土は1点だけである。偏平な礫を打割し、打割面側を主に加工している。石斧的に機能したもので破損品と考えている。

(小田川)



番号	位置	層位	器種	形状	土質	紋様	外 表 装 飾	内面装飾	備考	数量
1	D-15	1層	深鉢	山鉢	砂粒	整肌	山帯部刻目	ナシ		3
2	D-15	1層	深鉢	山鉢	砂粒	整肌	砂中刻目、口縁→口部環状、ヘラナシ	ヘラナシ		14
3	D-15	1層	深鉢	口鉢	砂粒	整肌	口部部刻目、ナシ			4
4	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	横線部系線刻目	ヘラナシ		11
5	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	ナシ			10
6	溝敷	1層	深鉢	煎	砂粒、石片	中々肌	縁部刻目、縁部			7
7	D-15	1層	深鉢	山鉢	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺(環状)、3方キ	3方キ	2~15段 断片	7
8	D-15	1層	深鉢	山鉢	砂粒	整肌	口縁→4行瓦葺1条	3方キ	2~15段 断片	9
9	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	口縁→4行瓦葺1条、口部縦刻目、3方キ	3方キ	2~15段 断片	15
10	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺(横円)、3方キ	3方キ	2~15段 断片	6
11	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺(横円)、3方キ	3方キ	2~15段 断片	8
12	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺、3方キ	3方キ	2~15段 断片	12
13	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺(環状)、3方キ	3方キ	2~15段 断片	23
14	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺、3方キ	3方キ	2~15段 断片	1
15	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	三条単位環状瓦葺(横円)、3方キ	3方キ	2~15段 断片	5
16	D-15	1層	深鉢	煎	砂粒	整肌	直線ヘラナシ	ヘラナシ		7
番号	出土地点	層位	器種	形状	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重量(g)	石 質	備 考
17	壕集中地点	不明	罐	器	55	19	16	73.4	輝緑凝灰岩	S-52

第8図 遺構外出土遺物

第4章 まとめ

本遺跡の原地形は、沢地に挟まれた馬背状の小丘陵地であったものと思われる。この小丘陵のほぼ頂部を切り崩し国道が建設されているほか、国道脇は工場建設の際に大きく削平攪乱され、遺跡の遺存状態は悪い。

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑21基、焼土炭化物範囲1ヶ所である。遺物は少なく、縄文時代の土器と石器が約80点と平安時代の土師器が2点出土した。

1軒だけ検出した竪穴住居跡は、南側の斜面地に構築されている。斜面地という立地のほか、攪乱により遺存状態は悪く、規模と形態については詳細に欠ける。炉は不整な礫を配置した石組炉であり、拠点としての住居であったものと思われるが、炉内の焼土も薄く配置された礫の被熱も弱いことから、長期間に営まれた住居の感じが見受けられない。このことは、住居内の遺物の少なさもあるが、住居周辺からの出土遺物が少ないことからいえる。国道や削平された部分に、他の住居跡があった可能性もあるが、出土遺物数からも集落といえるほど住居が存在していた可能性は少ないと思われる。

検出された土坑は、近代の炭窯を除き、溝状土坑14基とその他のものが6基ある。溝状土坑は、いわゆる落とし穴として機能したものと考えているが、本遺跡での構築位置からは規則性を見いだすことはできない。隣接する平塚(2)遺跡で検出された、同じ溝状土坑が地形を考慮して、有効的に配置構築された可能性があるのに対し、本遺跡のものは単独で無作為につくられた可能性が強く感じられる。縄文時代の所産と思われるが、明確な帰属時期は不明である。

これら溝状土坑のほかに、縄文時代に比定される土坑は、調査B区で検出された4基の土坑がある。この土坑は、規模と形態がほぼ同じで4基がほぼ等間隔にあることから、意図的に配置されてつくられた可能性がある。堆積土の状態は自然埋没の状態に近く、墓や建物の柱穴としてつくられたものとは考えられない。フラスコ状土坑とは形態の異なる、貯蔵穴としての機能も想定されるが推測の域を越えず、類例を待ちたい。帰属時期については、周辺から縄文時代後期十層内I式土器が、本遺跡の中でも数量的にまとまって出土していることから、これらの土器の時期の所産の可能性もある。

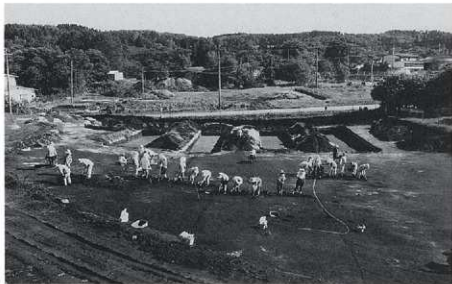
ほかに第9号土坑と第12号土坑は、ともに異なる形態であるが、堆積土の土質と第12号土坑に僅かに堆積していた火山灰から平安時代に比定されるものと考えている。

出土遺物は出土数も少なく、また細片が多い。出土位置は調査B区に多く、時期は縄文時代後期十層内I式土器と中期から後期のものであると思われるものがある。

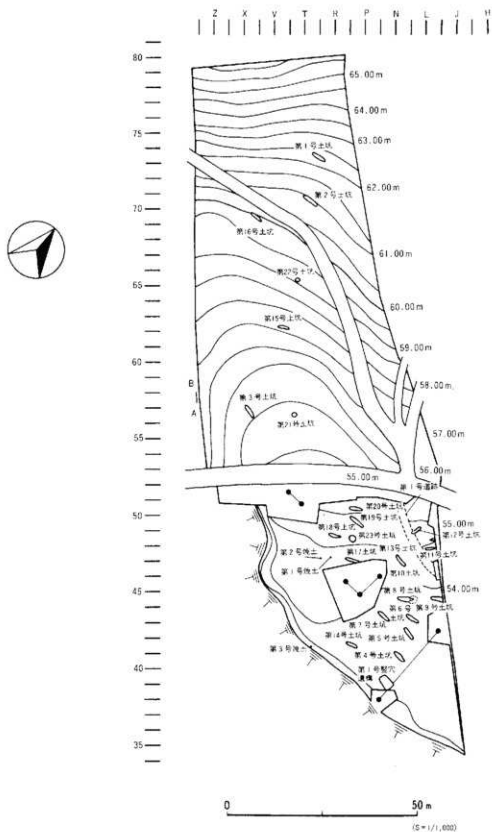
以上のように、検出の遺構の種類とその密度や出土遺物数から、本遺跡は、縄文時代では後述する平塚(2)遺跡と連動した狩猟を中心とした区域であり、本遺跡の周辺にこれらの落とし穴を構築し、糧とした集落があったものと考えられる。そのおよその時期は縄文時代後期項であり、その後この丘陵は生活域から離れるが、平安時代には再度生活域として使われる。南側の沢を隔ててある伝法寺館跡に平安時代の住居跡が検出されていることから、その時期に関連するものと考えられ、各時期で順次的に使用された丘陵地であったと思われる。

(小田川)

第4編 平窪(2)遺跡



作業状況(北から)



第1図 遺構配置

第1章 検出遺構

概要

本調査区は、丘陵地の南側に面した斜面部と沢に面した平坦地であり、調査区の中を旧国道が横断する。旧国道を境に南東側に平坦地が広く、沢地を挟み平窪(1)遺跡と対峙する。沢に面した平坦地は、現況で標高53mの荒地であったが、調査により造成されていたものと判明した。本来は北側の斜面から延びる緩傾斜地であるが、グリッドラインの40～50にかけて約40m四方の範囲は、最大5mもの盛土で覆われていた。盛土は基盤層の大きい粘土等を多量に混入させており、深く掘削されたものが投棄されていることが窺われ、おそらく、西側に通る国道4号線建設の際に掘削されたものと思われる。検出された遺構は、土坑24基、焼土跡3基、道跡1条である。大半の遺構は、沢に面した平坦地の盛土下で検出されている。ほかに、北側の斜面部に数基検出しているほか、焼土跡は第IV層の中振浮石層直下で検出している。

本遺跡の基本層序については、平窪(1)遺跡と近接しており、同一丘陵地内での堆積であることから、第3編の第1章で合わせて記述している。なお、本遺跡の土層図はグリッドライン57～58の調査区境界の西壁面で確認している。

第1節 土坑

第1号土坑 (第2図)

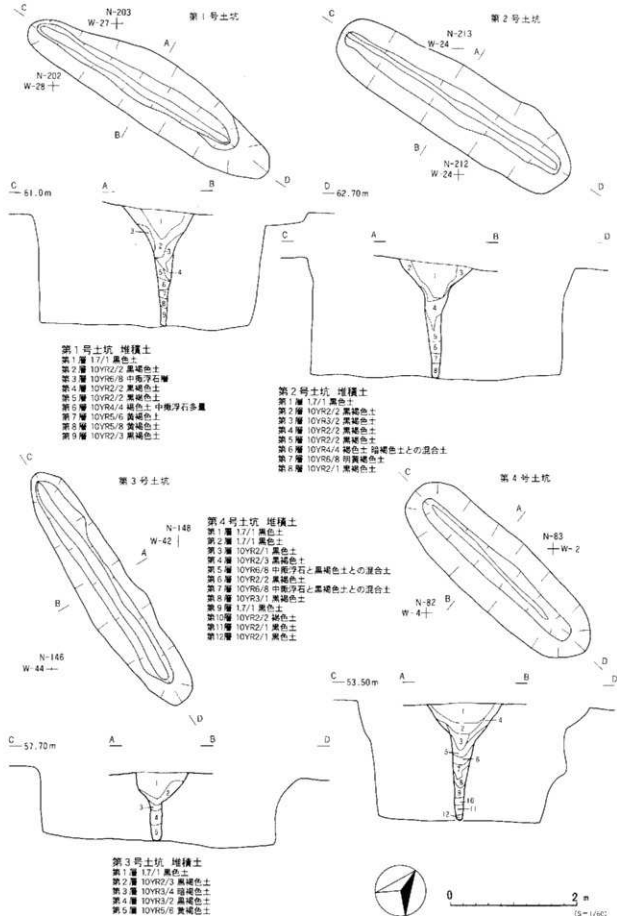
[位置と確認] 調査区北側の傾斜地、S-70グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で検出した。[平面形・規模] 平面形は、楕円形である。規模は開口部長軸4.4m、幅約1mで、底面は長軸3.5m、幅14cm、深さは1.7mである。[堆積土] 9層に分層される。黒褐色土を主体だが、中位層から下位層にかけて中振浮石を多く混入する。[底面・壁] 底面はやや起伏が多い。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面からほぼ直線的に立ち上がり、上端付近でやや外側に開く。

第2号土坑 (第2図)

[位置と確認] 調査区北側の傾斜地、R・S-73グリッドに位置する。第Ⅲ層下面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は、開口部長軸4.5m、幅1.2m、底面の長軸4m、幅10cm、深さは1.7mである。[堆積土] 8層に分層される。中振浮石が中位層で全体的に混入する。[底面・壁] 底面はやや起伏が多い。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。短軸方向の断面では、壁は多少凹凸を有しながらも直線的に立ち上がり、開口部付近で大きく外反する。

第3号土坑 (第2図)

[位置と確認] 調査区ほぼ中央、W-57・58グリッドに位置する。第Ⅲ層下面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は、開口部長軸4.3m、幅83cm、底面長軸3.7m、幅16cm、深さは約1mである。[堆積土] 5層に分層される。黒褐色土が主体であるが、第3層と第5層に中振浮石がブロック状に堆積している。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、北西壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。南東壁は中位に段を有し、開口部付近で外反



第2図 土坑(1)

する。短軸方向の断面では、壁は底面から直線的に立ち上がり、口縁部付近で外反する。

第4号土坑 (第2図)

[位置と確認] 調査区南側の平坦地、M-40グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸3.7m、幅1.2m、底面で2.6m、幅6cm、深さは1.9mである。[堆積土] 12層に分層される。全体的に中振浮石が混入する。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、北西壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でわずかに外反する。南東壁は底面から開口部まで外反しながら立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部にかけて大きく外反する。

第5号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査区南側の平坦地、M・N-41グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部約4m、幅約90cm、底面長軸で3.4m、幅12cm、深さは1.7mである。[堆積土] 7層に分層される。全体的に中振浮石の混入が多い。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく外に開く。短軸方向の断面では、壁は底面から緩やかに外側に開きながら立ち上がる。地滑りにより底面付近で僅かにズレが生じている。

第6号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査区南側の平坦地、L・M-42・43グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸で4m、幅約1m、底面長軸で3.5m、幅16cm、深さは1.5mである。[堆積土] 6層に分層される。黒色土が主体である。第3層と第4層で中振浮石層の崩落が見られる。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で緩く外側に開く。短軸方向の断面では、壁は底面から外傾しながら直線的に立ち上がり、開口部で大きく外側に開く。

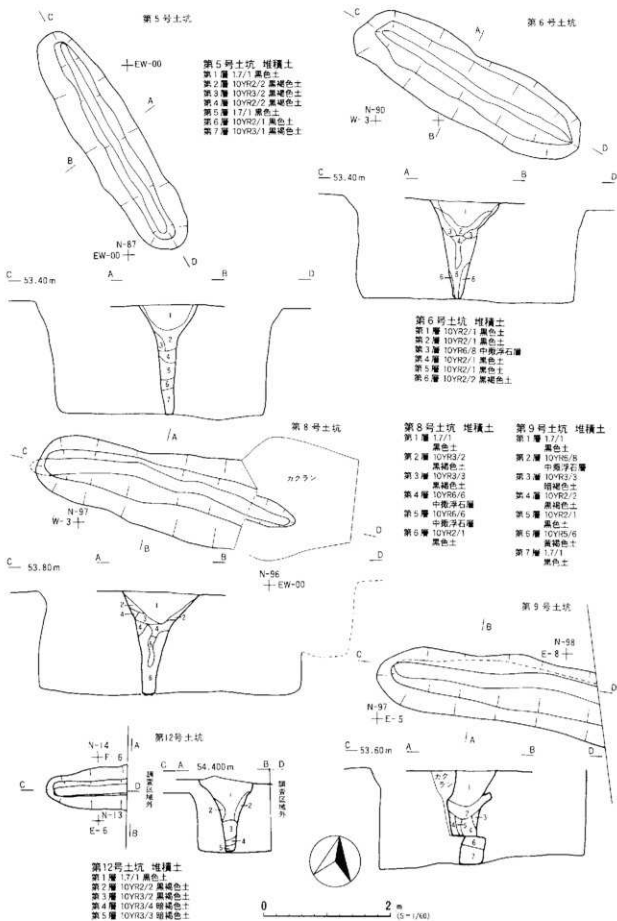
第7号土坑 (第4図)

[位置と確認] N・O-43グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸で4.4m、幅1.2m、底面長軸で3.9m、幅20cm、深さは1.7mである。[堆積土] 8層に分層される。黒褐色土が主体である。第6層の中振浮石層でズレが生じている。[底面・壁] 底面はやや起伏が多い。長軸方向の断面では、壁は底面から内傾しながら立ち上がり、開口部付近で外反する。短軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。地滑りにより、開口部から下部の約1.2mが全体的に南に向かって5cm程ズレている。

第8号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査区南側の平坦地、L・M-44グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 全体の約3分の1程度が攪乱を受けているが、ほぼ楕円形であると思われる。遺存する部分の規模は、開口部長軸で3.4m、幅1.4m、底面長軸で4.2m、幅20cm、深さは1.7mである。

[堆積土] 6層に分層される。上位層に中振浮石の混入が多い。湧水のため、第6層以下は土層でできなかった。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面からやや内湾ながら立ち上がり、開口部付近で外反する。短軸方向の断面では、壁は底面から開口部に向け外反して立ち上がる。一部地滑りによりズレが生じているのが確認された。



第3図 土坑(2)

第9号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査区東の境界にかかるJ・K-44グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 4分の1程度が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、ほぼ楕円形と推定される。検出した部分の規模は、開口部長軸で3.5m、幅約1m、底面長軸で3.3m、幅24cm、深さは1.5mである。[堆積土] 7層に分層される。黒色土が主体である。第2層に中振浮石粒が混入する。[底面・壁] 長軸方向の断面では、底面はやや起伏があり、西側に向かって傾斜する。壁は底面から垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。短軸方向の断面では、壁はやや外傾して直線的に立ち上がり、開口部付近で外反する。地滑りにより、開口部から下部の約1mが南方向に約20cmズレている。

第10号土坑 (第4図)

[位置と確認] 調査区南側の平坦地、M-46・47グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸で4.2m、幅90cm、底面長軸で3.8m、幅10cm、深さは1.2mである。[堆積土] 7層に分層される。第2層で中振浮石粒の混入がある。[底面・壁] 底面は中央部に段差があり、両端より中央が高くなっている。長軸方向の断面では、壁は底面からやや外傾気味に立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向け外側に開く。地滑りのため、開口部から下部約1mが南に向かって約15cmズレている。

第11号土坑 (第4図)

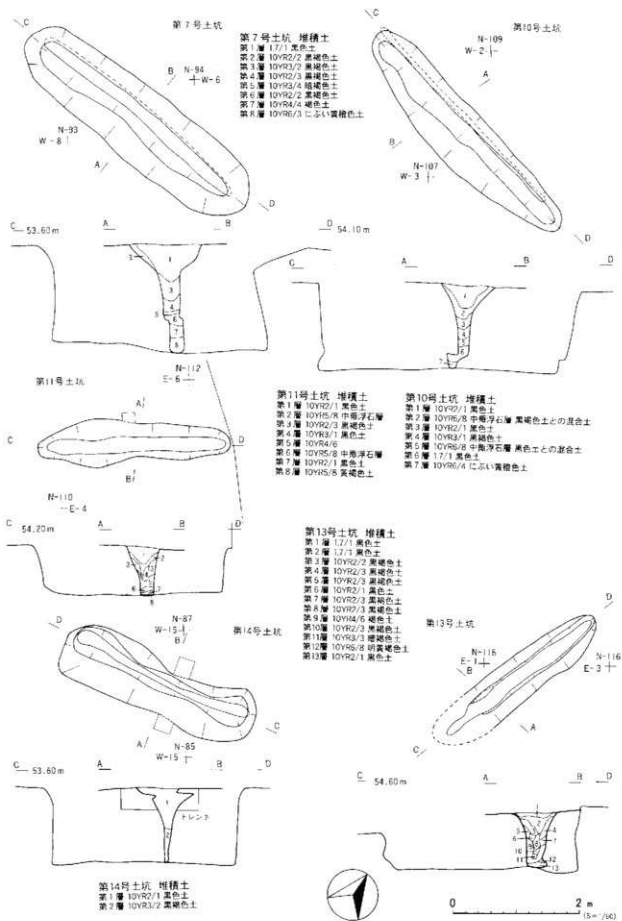
[位置と確認] 調査区東側の平坦地K・L-47グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は概ね楕円形であるが、西半は広がっている。規模は開口部長軸で3.1m、幅55cm、底面長軸で約3m、幅26cm、深さは74cmである。[堆積土] 8層に分層される。黒色土と黒褐色土を主体にする。第2層と第6層に中振浮石粒が多量に混入する。[底面・壁] 長軸方向の断面では、壁は底面から緩く直線的に立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面から中位まで垂直に立ち上がり、開口部に向かって外側に開く。底面はほぼ平坦である。

第12号土坑 (第3図)

[位置と確認] 調査区東側の平坦地K-48グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 本遺構の大部分が調査区外に延びているため全体形は不明であるが、平面形は楕円形と推定される。遺存する部分の規模は、開口部長軸で1.3m、幅72cm、底面長軸で1.2m、幅14cm、深さ92cmである。[堆積土] 5層に分層される。黒色土と黒褐色土主体である。[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で外反する。短軸方向の断面では、壁は底面から中位まで直線的に立ち上がり、開口部に向かって外側に開く。

第13号土坑 (第4図)

[位置] 調査区東側の平坦地L-48・49グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] トレンチにより壊してしまったが、平面形は楕円形である。規模は、開口部長軸で約3m、幅70cm、底面長軸約3m、幅20cm、深さ86cmである。[堆積土] 13層に分層される。全体に、黒褐色土主体で中振浮石が混入する。[底面・壁] 底面は起伏が多い。長軸方向の断面では、壁は底面から中位にかけてやや内側に立ち上がるが、中位から上位にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面から外側に開きながら立ち上がる。



第4図 土坑(3)

第14号土坑 (第4図)

〔位置と確認〕 調査区南側傾斜地の手前P・Q-41グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 平面形は概ね楕円形であるが、中央部が内側に括れる。規模は開口部長軸で3.3m、幅94cm、底面長軸で約3m、幅20cm、深さ1.2mである。〔堆積土〕 2層に分層される。黒色土が主体である。〔底面・壁〕 底面は両端に比べ、中央部が若干高くなっている。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で外に開く。短軸方向の断面では、壁は底面から大きく外側に開きながら立ち上がる。南の方向に約30cm、第1層上面で確認面から下位に約20cmの規模で地滑りの跡を確認した。

第15号土坑 (第5図)

〔位置と確認〕 調査区北側の緩い傾斜地U-62グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸で約3m、幅64cm、底面長軸で2.7m、幅16cm、深さは約1mである。〔堆積土〕 6層に分層される。第2層と第5層に中振浮石粒の混入がみられる。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は東端で底面からやや内側に立ち上がり、開口部付近で外側に開く。短軸方向の断面では、壁はやや外傾して直線的に立ち上がり、開口部付近で外側に開く。

第16号土坑 (第5図)

〔位置と確認〕 調査区西側の傾斜地V・W-69グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。〔平面形・規模〕 トレンチにより一部壊されているが、ほぼ楕円形と思われる。規模は、開口部長軸で約4m、幅約1m、底面長軸で3.5m、幅16cm、深さ約2mである。〔堆積土〕 7層に分層される。全体に中振浮石を多量に含む。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は凹凸を有しながらほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外に開く。短軸方向の断面では、壁は凹凸を有しながら立ち上がり、開口部付近で外側に開く。

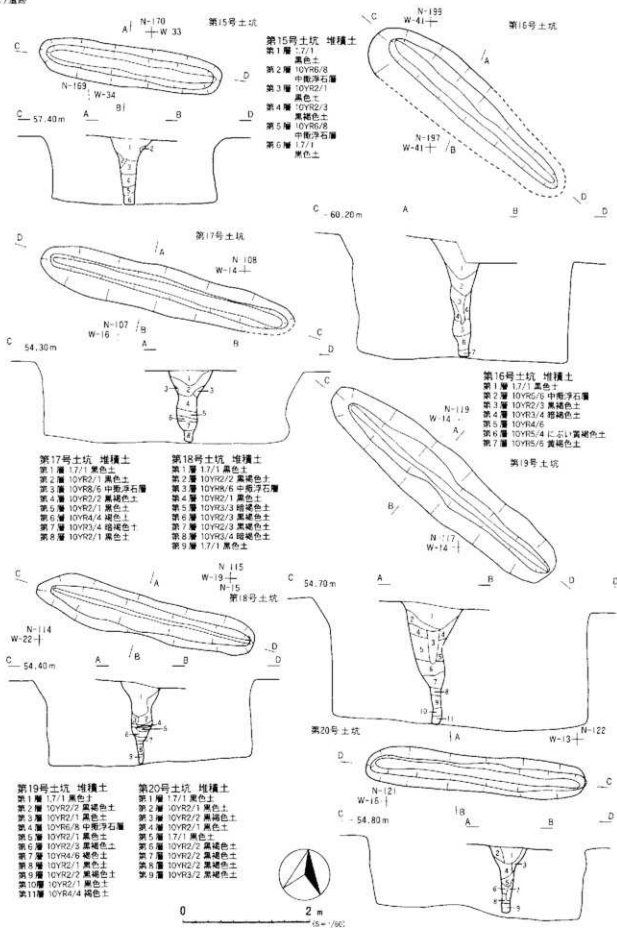
第17号土坑 (第5図)

〔位置と確認〕 調査区中央の平坦地P・Q-46・47グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 平面形は楕円形である。規模は開口部長軸で4.2m、幅74cm、底面長軸で3.8m、幅14cm、深さは1.2mである。〔堆積土〕 8層に分層される。黒色土と黒褐色土を主体とする。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面直上でオーバーハングし、開口部に向かって外反する。短軸方向の断面では、壁は底面直上で垂直に立ち上がり、中位から一度外側に開いて緩やかになり、開口部に向かって外に開く。〔出土遺物〕 堆積土中からIV-B類の土器7片が出土した。そのうち、6片を第7図に図示した。7-1は口縁の波頂部に渦巻状の沈線文が描かれ、横位に展開していく。7-2は丸味を帯びた波頂部を持つ折り返し口縁で、直下に横位に沈線が入る。7-3は、尖先の鋭い工具で沈線が横位に3条施文される。7-4・5・6は同一個体である。渦巻、弧状、直線などを沈線によって表している。底部付近は無文である。胎土は砂粒・雲母を多く含むが密である。

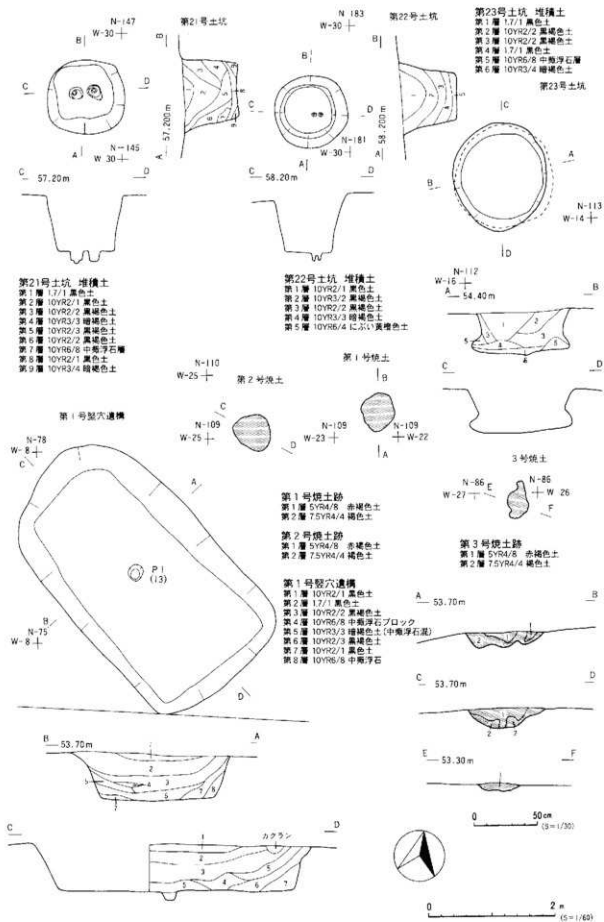
〔結〕 出土遺物から、縄文時代前期から縄文時代後期前葉までの間に構築されたものと思われる。

第18号土坑 (第5図)

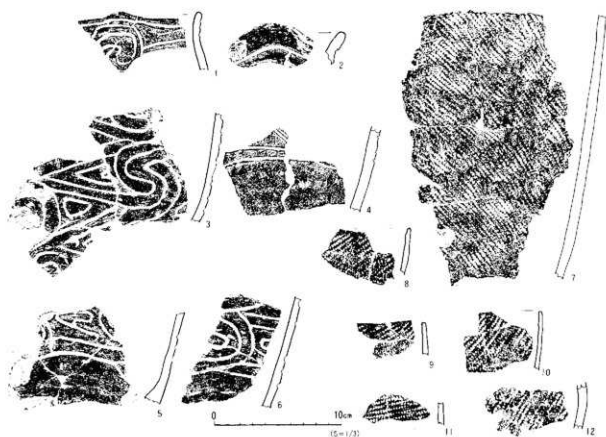
〔位置と確認〕 調査区中央の平坦部Q・R-48グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 平面形は、両端がやや膨らんだ楕円形である。規模は開口部長軸で3.6m、幅60cm、底面長軸



第5图 土坑(4)



第6図 土坑(5)・竪穴遺構・焼土



番号	位置	層位	土質	器種	部位	出土	各 器 類 型	内径調整	備考	整理
1	17土	赤城土	D-C	深鉢	口縁		浅飯			7
2	17土	赤城土	D-B	深鉢	口縁		上縁粉土付			5
3	17土	赤城土	D-B	深鉢	底	石灰・磁粉	浅飯・ナデ		17.55戻	2
4	17土	赤城土	D-B	深鉢	底	粉灰	浅・浅飯			6
5	17土	赤城土	D-B	深鉢	胴・底	石灰	浅飯(5.5戻) 底部付底縁支	ナデ(ナデ)	17.36戻	4
6	17土	赤城土	D-B	深鉢	底		浅飯・ナデ		17.25戻	1
7	23土	赤城土	D-C	深鉢	別	粉灰	1.8戻(4.5戻) 1.8戻(4.5戻) 1.8戻(4.5戻) 5cm	ヘリナリ(ナデ)		1
8	23土	赤城土	D-C	深鉢	口縁		1.8戻(4.5戻) 2.5戻(ナデ)	ナデ		3
9	23土	赤城土	D-C	深鉢	口縁		1.7戻(4.5戻) ナデ(ナデ) 1.7戻(ナデ)			5
10	23土	赤城土	D-C	深鉢	別	粉灰	1.7戻(4.5戻)			5
11	23土	赤城土	D-C	深鉢	底		1.8戻(4.5戻)			7
12	23土	赤城土	D-C	深鉢	別		1.8戻(4.5戻)			2

第7図 土坑出土遺物

で3.3m、幅10cm、深さは1.3mである。[堆積土]9層に分層される。黒褐色土を主体とする。[底面・壁]底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面は、壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で緩く外側に開く。短軸方向の断面では、壁が底面から凹凸を有しながら外側に開いて立ち上がる。

第19号土坑 (第5図)

[位置と確認] 調査区中央の平地地P-49グリッドに位置する。第IV層面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形である。規模は開口部で4.5m、幅96cm、底面長軸で4.1m、幅14cm、深さは約2mである。[堆積土]11層に分層される。[底面・壁]底面はほぼ平坦である。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で外反する。短軸方向の断面では、壁は底面から中位までほぼ垂直に立ち上がった後、括れを有しながら開口部まで外反する。

第20号土坑（第5図）

〔位置と確認〕 調査区中央の平坦地P-50グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 平面形は細長い楕円形である。規模は開口部長軸で3.5m、幅54cm、底面長軸で3.3m、幅14cm、深さは約1mである。〔堆積土〕 9層に分層される。黒色土が主体である。〔底面・壁〕 底面は、中央付近が若干高く、西側に向かって落ち込んでいる。長軸方向の断面では、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。短軸方向の断面では、壁は底面から外側に向かって緩やかに立ち上がる。

第21号土坑（第6図）

〔位置と確認〕 調査区中央の傾斜地T-56グリッドに位置する。第VII層直上面で検出した。〔平面形・規模〕 底面は平坦である。開口部の径が約1.2mの不整形円形である。深さは84cmである。〔堆積土〕 9層に分層される。黒色土と黒褐色土を主体にし全体的に中振浮石を混入する。〔底面・壁〕 壁は底面からほぼ直線的に立ち上がる。床面中央に径5cm、深さ20cm程度の小穴を2個検出した。

第22号土坑（第6図）

〔位置と確認〕 調査区西側の傾斜地T-65グリッドに位置する。第VII層直上面で検出した。〔平面形・規模〕 径が約1.2mの円形である。深さは90cmである。〔堆積土〕 5層に分層される。黒色土と黒褐色土を主体にし全体に南部浮石を混入する。〔底面・壁〕 壁は底面から直線的に外反して立ち上がり、中位から開口部に向かって緩やかに外反する。底面はほぼ平坦である。床面中央東寄りに径8cm、深さ10cm程度の小ピットを2個検出した。

第23号土坑（第6図）

〔位置と確認〕 調査区中央平坦地P・Q-48グリッドに位置する。第IV層面で検出した。〔平面形・規模〕 開口部で約1.8m、幅1.5m、底面の径が約1.7mの不整形円形である。深さは70cmである。〔堆積土〕 6層に分層される。黒色土と黒褐色土が主体である。〔底面・壁〕 底面はやや起伏がある。壁は中位に括れを有するフラスコ状である。

〔出土遺物〕 堆積土よりIV-D2の土器片が9片出土した。そのうち6片を図示した。RL縄文を横位に回転施文する断面の厚い器形の土器（7・7・12）とLR縄文を口唇部まで横位に回転施文した薄い器形の土器（7・8・9・10・11）に分かれる。

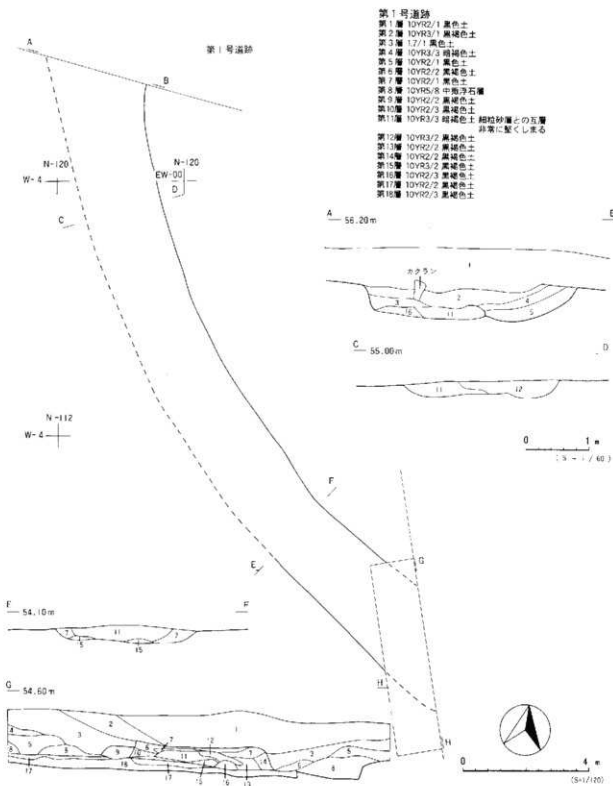
〔小結〕 出土遺物から、縄文時代前期以降に構築されたものと思われる。

第2節 竪穴遺構（第6図）

〔位置と確認〕 調査区南側N-38・39グリッドに位置する。Ⅲ層下面で検出した。〔平面形・規模〕 不整形丸方形で長軸4.4m、短軸2.6mである。〔底面・壁〕 底面はほぼ平坦である。底面中央に深さ13cm程度のピットを1個検出した。壁は底面から緩やかに立ち上がる。北西壁59～75cm、南東壁55～58cm、南西壁57～68cm、北東壁60～67cmである。〔堆積土〕 自然堆積で、8層に分層される。壁際付近の堆積土は中振浮石を多く含む。黒～黒褐色土主体である。

第3節 焼土

第VII層面で3箇所の焼土跡を検出した。各焼土はほぼ同規模であり、地面を掘り込んだうでで火が焚かれている。土層観察で褐色土中に焼土粒が混入していることから、ある程度の時間差で数度火が



第8図 遺跡

焚かれていた可能性がある。同層面では他の遺構は検出できず、単体の野外炉の可能性が考えられる。本焼土の周辺から縄文時代早期及び前期初頭の土器が出土していることからこれらの時期のものとの可能性がある。

第1号焼土（第6図）

[位置と確認] 調査区中央の平坦地R-47グリッドに位置する。[平面形・規模] 長軸60cm、短軸50cmの不整形である。[堆積土] 焼土は約12cm堆積している。焼土には周囲の土が混在している。底面はかなり起伏がある。第2層には褐色土と焼土が混合している。

第2号焼土（第6図）

[位置と確認] 調査区中央の平坦地S-47グリッドに位置する。第1号焼土と約1.5mの間隔で隣接して検出した。[平面形・規模] 長軸60cm、短軸55cmの不整形である。[堆積土] 焼土は約15cmであり、第2層には褐色土と焼土が混合している。

第3号焼土（第6図）

[位置と確認] S-41グリッドに位置する。[平面形・規模] 長軸60cm、短軸35cmの不整形である。[堆積土] 焼土の堆積は5cm程度だが、かなり堅くしまる。

第4節 道跡

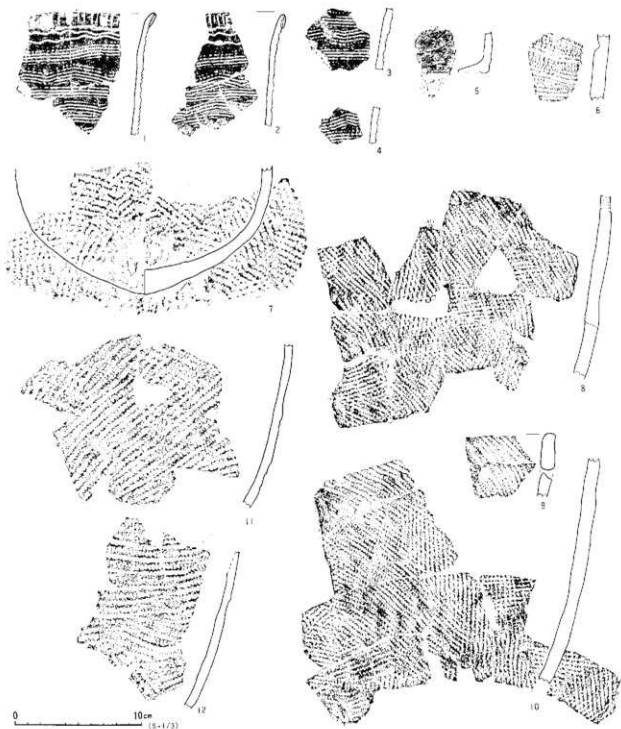
第1号道跡（第8図）

[位置と確認] 調査区中央の平坦地K~M-46~50グリッドに位置する。この部分は、表土直下が第IV層下面及び第V層面、表土除去後に非常に強く踏み固められた面を検出し土層観察により道跡と判断した。[平面形・規模] 踏み固められた面には現代の攪乱が多数見受けられたが、検出した部分で、最大幅約2.5m、長さは約22mある。全体としては、緩く曲がりながら、南側調査区外に伸びている。旧国道の北側に検出されなかったことから、旧国道に沿って伸びている可能性がある。[堆積土] 第1層から第4層は、第II層に相当する土で柔らかく攪拌されている。第5層以下は強く、特に第11層の上下層は強くしまっている。また、第6層から第17層までの各土層には砂粒や炭化物を混入した層とグライ化した層もみられることから、流水にさらされていた期間が数度あったと思われる。[小結] 時期については明確にできないが、近接してある伝法寺館跡と集落、現国道が奥州街道であったことから、これにつながる道跡であった可能性がある。

第2章 遺構外出土遺物

第1節 縄文土器（第9図~第11図）

本遺跡出土の遺構外土器は破片数にして839個出土した。出土分布の状況は、調査区南側の45~50グリッド付近での出土が目立った。また、遺跡内の堆積層での出土量は、第IV層の中振浮石の下層で第VI層からの出土量が最も多い。土器の年代は、縄文時代早期から後期の範疇に収まるものと思われる。



番号	位置	層位	分類	器種	部位	胎土	外面装飾	外面修整	備考	整理
1	N-40	IV層	I-A	深鉢	口縁	砂粒・石灰	白灰部→紅褐色口縁、上から斜目、胴部→黒褐色、引文文			A1
2	N-40	IV層	I-A	深鉢	口縁	砂粒・石灰	白褐色→紅褐色口縁、上から斜目、胴部→黒褐色、引文文			A2
3	N-40	IV層	I-A	深鉢	胴	砂粒・石灰	黒褐色→引文文(5条単位)			A3
4	N-40	IV層	I-A	深鉢	胴	砂粒・石灰	黒褐色→引文文(5条単位)			A5
5	S-45	V層	I-A	深鉢	胴	砂粒・石灰	黒褐色→引文文(4条単位)			S4
6	S-43	V層	I-A	深鉢	胴部	砂粒・石灰	黒褐色→引文文			A11
7	S-47	V層	II-A	深鉢	胴部	砂粒・石灰	丸底、黒褐色土質、上から斜目多量単位			K12
8	S-45	IV層	II-A	深鉢	胴	繊維・炭粉	黒褐色→引文文、赤褐色→引文文→黒褐色			S8
9	S-45	IV層	II-A	深鉢	胴	繊維・炭粉	黒褐色→引文文(口縁部)			S2
10	S-45	IV層	II-A	深鉢	胴	繊維・炭粉	文、黒文、赤褐色→引文文			S9
11	S-47	IV層	II-A	深鉢	胴	繊維・炭粉	1段黒褐色→黒褐色、赤褐色→引文文	十字		S3
12	S-47	IV層	II-A	深鉢	胴	繊維・炭粉	1段黒褐色→黒褐色、赤褐色→引文文	十字		S4

第9図 遺構外出土器(1)

第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器

A類 吹切沢式土器に相当する土器（9-1～6）

貝殻を施文する一群である。1～4・6は同一個体である。合わせて11片出土した。口縁は折り返し口縁で、上から棒状工具で刻目を入れる。口縁直下には工具による横位の波状沈線を入れ、胴部の文様は5条単位の貝殻腹縁による横位の波状の押し文である。焼成は全体に良好で、土器内面は黒褐色である。底部は剥離のため、全体の器形は不明である。5は胴部破片のみで型式を断定し難いが、この類に含めた。貝殻腹縁による4条単位の押し文である。上記の土器に比べると砂粒・石英が多く含まれる。焼成は堅く良好である。

第Ⅱ群土器 縄文時代前期の土器

A類 長七谷地Ⅲ群に比定される土器（9-7～12）

9-8・10、9-11・12はそれぞれ同一個体である。9-8・10はR L縄文を多方向に施文し縦位・横位の羽状縄文にしている。9-8は接合帯付近の剥落した部分にも縄文を施文している。9-11・12はL R縄文を主として斜位に施文している。9-7は底部が丸底風尖底である。胴部に0段多条を横位に施文する。9-9はR L縄文を横位に施文し、両面穿孔している。

B類 前期前葉に相当する土器（10-1～3）

10-1・2は口唇部付近まで燃糸文を施文している。断面形は口縁付近から下がるにつれて徐々に厚みを増す。10-1の口唇は面取りしている。10-3はR L縄文を横位に施文している。断面は非常に厚い。

C類 円筒下層a式に比定される土器（10-4・5）

破片数で4点出土した。10-4は口縁部が外傾する器形である。口唇部に断面三角形の工具による刻目を横位に入れる。口縁部文様帯には結節縄文を施文し、胴部には横位にL R縄文を施文する。胎土・焼成は全体に砂粒・植物繊維が混入するが良好である。10-5は胴部でL R L縄文を横位に施文する。全体に繊維が多く混入する。

D類 円筒下層d式に比定される土器（10-6～9）全て胴部片で木目状単軸絡条体を縦位に施文する。10-7は縄文施文後、ヘラ状工具によるナデ調整が行われる。色調は10-7が褐色である他は黄褐色である。胎土も10-7は植物繊維が多く混入するが、その他は、砂粒の混入が目立つ。

第Ⅲ群土器 縄文時代中期の土器

A類 大木8 a式に比定される土器（10-10）

1点出土した。口唇部に突起を持ち、口縁部がキャリバー状の器形である。調整は口唇部から口縁にかけて丁寧に磨かれている。内面は横方向のケズリ痕がある。色調は内外面とも黒褐色であり、焼成も良好である。

B類 円筒上層式に相当する土器（10-11）胴部片で横位にループ文を施文する。胎土は植物繊維を混入する。内面調整は縦位にミガキを入れる。